

カカオ栽培前線の歴史的展開

山本 通

A Note on the Historical Development of the Cocoa Cultivation Fronts

Toru Yamamoto
Kanagawa University

【要約】 スペイン人がメソアメリカで「飲むチョコレート」に出会ってから、カカオを飲む習慣はスペイン帝国と欧州に広がった。それに伴い、カカオ栽培前線はベネズエラ、トリニダード、エクアドル、パヒアなどの中南米に展開した。19世紀末には欧州で固形の「食べるチョコレート」に関する一連の技術革新が起こった。これは、カカオ豆への需要の幾何級数的な増大を生んだ。そのために、カカオ栽培前線は大西洋を渡り、赤道アフリカ（サントメ・プリンシペやカメルーンなど）と西アフリカ（ガーナ、コートジボワールなど）に拡大した。カカオ栽培の必須条件は熱帯雨林と良好な交通手段と豊富な労働力である。カカオ栽培はこれらの条件を満たす地域で、肥沃な処女林を貪欲に開発することによって発展した。当初は強制労働が大規模に利用されたが、20世紀初めまでに、移民労働者を含む小規模な粗放栽培が優位に立った。カカオ栽培は大規模な農園経営や集約的農法に適さないのであった。

【キーワード】 カカオ、チョコレート、強制労働、耕作様式、栽培方法

【Summary】 Since the Spaniards encountered 'drinking chocolate' in Mesoamerica, habit of drinking chocolate spread over the Spanish empire and Europe. In response to the growth of demand, cocoa cultivation developed to Latin-America. In the late 19th century, a series of technical innovations of 'eating chocolate' occurred in Europe. This caused a geometric growth of demand to cocoa beans. Because of this, cocoa fronts went over the Atlantic and spread over Tropical Africa (Sao-Tome and Principe, Cameroon, etc.) and West Africa (Ghana, Cote-d'Ivoire, etc.). Essential conditions for cocoa cultivation are tropical rain forests, good means of transportation and abundant labour force. Cocoa cultivation developed in the areas which meet these conditions, exploiting greedily fertile virgin forests. In these areas coerced labour force was massively introduced, but by the early 20th century small scale extensive cocoa cultivation became predominant. Cocoa cultivation proved to be not suitable to massive plantations and intensive cultivation.

目 次

1. はじめに：チョコレートからカカオへ
2. カカオの栽培方法
3. カカオ消費の歴史的展開
4. カカオ栽培前線のメソアメリカから南米への展開
5. カカオ栽培前線の赤道アフリカから西アフリカへの展開
6. おわりに：まとめと展望

1. はじめに：チョコレートからカカオへ

我国ではチョコレート産業の歴史に関する文献が幾つか刊行されてきた。そのほとんどは外国書の翻訳であるが、読者に当該テーマへの興味を抱かせるには充分である⁽¹⁾。しかし、チョコレートの原料であるカカオ産業については、ガーナなどについて幾つかの専門的研究があるが、その世界史的展開を俯瞰した文献は無いようである。その理由は、カカオ産業が中南米と中央・西アフリカを中心に発展してきたことにある。一般の日本人は世界のこれらの地域の産業については、ほとんど興味を持たないのである。しかしカカオ産業史を紐解くと、そこにはヨーロッパ諸国の中南米やアフリカに対する植民地政策のあり方、奴隷制の社会的諸問題、農業の生産様式と耕作様式の問題などの興味深い問題が関係していることがわかる。したがって、カカオ産業史については、英語、フランス語、ドイツ語、スペイン語そしてポルトガル語で数多くの研究文献が発表されてきた。筆者はそれらの全体を参照することは到底できないので、本稿では主にクラレンス＝スミスの研究業績を中心に⁽²⁾、カカオ栽培前線の歴史的展開のあらすじを描いてみたい。

最初に、カカオと競合する他の熱帯産商品作物について説明しておこう。コーヒーとカカオは、栽培のための気候条件が少し異なる。コーヒー栽培のためには、長い雨季だけでなく、長い乾季が必要である。カカオ栽培にとっては、長い雨季と断続的な短い乾季が好都合である。したがって、両者の栽培地域はわずかに異なる。ブラジルで、サンパウロ州がコーヒー栽培の中心地となり、カカオ栽培の中心地がその北のパヒア州であったのが、その一例である。ところが、砂糖黍やゴムや椰子やプランテイン（食用バナナ）の栽培条件はカカオのそれとほぼ重なる。ただし、ゴムや椰子やプランテインの木はカカオの木と共生できる。それらがカカオのための緑陰樹になりうるからだ。しかし、砂糖黍とカカオは競合する。そのために、トリニダードで見られたように、砂糖黍プランターとカカオ生産者の間に土地をめぐる闘争が展開した。

2. カカオの栽培方法

カカオの原産地は中南米の熱帯雨林であり、メキシコ南部からアマゾン流域までの広い地域に自生していた。カカオは熱帯雨林の低層の樹木であり、一年を通して豊富な熱量と湿気、そして強風からの保護を必要とする。ただし、カカオ豆は収穫後に日光で乾かす必要があり、一年中過

(1) 山本、2018。

(2) Clarence-Smith, W. G. ed., 1996; Clarence-Smith, W.G., 2000.

度な降雨があると、細菌性の病気がカカオの木に発生する可能性が高い。日陰で育てば、木の寿命は長くなる。したがって栽培するときには緑陰樹を植えて天蓋を作ることも行なわれた。水捌けさえよければ、カカオはさまざまな土壌で生育する。カカオの木は寒さに弱く、熱帯でも海拔600メートル以上では実を結ばない。世界の赤道地帯の広大な地域がカカオの生育に適しているのだが、実際に大規模にカカオが栽培されたのは、交通の便（特に水運）がよく、労働力の調達容易な地域だけであった。カカオ栽培開拓前線の出現を決定づけたのは、一定の気候条件の下での森林の社会的入手可能性 social availability と労働力の適切な供給だったのだ。例えば、アマゾン河中流域ではカカオが自生したが、栽培は行なわれなかった。アジアのモンスーン地域では、19世紀までカカオは重要な作物にならなかった。アフリカのコンゴ盆地には19世紀末にカカオが持ち込まれたが、ここも重要な産地にはならなかった⁽³⁾。

カカオ豆には元来、ポリフェノールの含有量が異なるクリオロ種とフォレストロ種の2種類があった。クリオロ種はポリフェノールの含有量が少なく、苦みや酸味が少なく、独特の芳香が強い。しかし、種子を植えてから実を結ぶまでに8年を要し、栽培が難しい。緑陰樹を植えて直射日光を避け、風通しを良くし、灌漑・排水の施設を作り、苗木を植えて丁寧に剪定と除草を行う必要があった。他方フォレストロ種は、ポリフェノールを多く含み、苦みが強いので、ミルクをブレンドするのに適している。これは、粗放的な農法で育ち、種子を植えてから約5年で実を結ぶ。最も粗放的な栽培法を例示すると、地面に穴を掘らずに種子を直接蒔き、自然の高木を緑陰樹として利用し、剪定を行わず、高い枝の実をナイフを付けた棒で切り取るという具合であった⁽⁴⁾。

スペイン人による征服以前にカカオが栽培されていたのはメソアメリカ（古代アメリカ文明が花開いた地域に文化人類学者が付けた名称で、具体的にはメキシコ南部とそれに隣接する中米地域をさす）だけであり、南米ではそれ以前にはカカオ栽培は行なわれていなかった⁽⁵⁾。メソアメリカで栽培されていたのはクレオロ種のカカオであった。他方、南米のエクアドルやアマゾン河流域ではフォレストロ種が森の中で自生していた。カカオ豆の種類には、その他にクレオロ種とフォレストロ種を掛け合わせた交配種があり、それらの中では、トリニダードで作られたトリニタリオ種が有名である。

カカオの木はせいぜい10メートルの高さにまでしか成長しない。幹や太い枝に直接小さな花が咲き、受粉してできた実がラグビーボールを小さくしたような形状の莢に成長する。この莢をカカオ・ポッドという。その中には白い果肉に包まれて、アーモンド状の種子が30~40個入っている。収穫後、果肉ごと種子を取り出して、集めて発酵させる。発酵によって種子は褐色に変わり、独特の風味が生まれる。発酵が終わると種子を取り出して太陽熱で乾燥させ、これを袋詰めする。ただし、人工乾燥させる場合もあった⁽⁶⁾。

カカオ栽培者にとっての自然界の敵は、災害と害虫と病気であった。カリブ海の島々はしばしば、火山の噴火やハリケーンの被害に遭った。また、カカオ産地はしばしばイナゴの大発生による被害にも遭った。しかし、これらはカカオ栽培に特有の現象ではなく、熱帯・亜熱帯産作物に共通するものである。しかし、カカオには特有の害虫や病気があった。グレイ・モスなどの蛾が

(3) Clarence-Smith, W. G., 2000, p.163; Clarence-Smith and Ruf, 1996, p.2.

(4) Clarence-Smith, W.G.,2000, p.173.

(5) Clarence-Smith, W.G.,2000, p.126.

(6) 武田、2010、3~8頁。

卵を産みつけて、その幼虫がカカオの木を枯らしてしまうとか、天狗巣病 *witches broom* のようなさまざまな細菌病がカカオの木を枯らし、そのために一地域のカカオの木を全滅させることもあった。ただし、これらの被害は若木、特にフォレストロ種の若木には発生しないのであり、樹齢の大きな老木、あるいは自然環境が不適切な地域の木が最初に被害を受けた。

大航海時代以後にスペイン人がココアを飲む習慣を身につけてから1765年頃までに、カカオは主にクリオーリョ（中南米で生まれた白人）を中心としたヨーロッパ系農園主によって地主管理農園 *demesne estates* で栽培された。それは、彼らが地主として社会的影響力を持ち、不自由労働を利用できたからである⁽⁷⁾。強制労働は経済的に割に合わず、自由主義思想からの挑戦を受けたにもかかわらず、永い間採用されたが、それは地主にとって先住民や奴隷の入手が容易だったからである。しかし、フランスとその植民地では、18世紀末の大革命の時期に奴隷制は廃止され、イギリスでも1833年に帝国内全域での奴隷制が廃止された。また1830年頃までに中南米のスペイン領植民地は次々に宗主国から独立して、奴隷制を廃止した。解放奴隷には小生産者になる希望が与えられた。カカオは小規模栽培に適しているので、先住民（インディオ）や混血人の一部もカカオ栽培に参入していった。19世紀中頃からは、世界のカカオは主に自由労働によって栽培されたのである。しかしその後も、強制労働は世界各地に点々と残存し、19世紀末に中央アメリカや中米で大農園が再興すると、強制労働復活の新たな波が起こった⁽⁸⁾。

19世紀末のカカオ・ブームの到来によって、熱帯雨林に大農園が次々に開かれた。新たな入植者や西洋企業の経営者たちは「原始林の工場」の熱心な主唱者だった。その集約的栽培方法は高価な機械や建物と、多数の労働力を必要とした。森林の土地は非常に廉価だが、労働力や機械は非常に高くついた。「科学的」方法での種子の選別や接ぎ木は実践には適していなかった。そして、除草・植樹・剪定・収穫・発酵を機械化する費用は、天文学的な数字になった。農園主にとっての最大の弱点は、カカオ価格が下落した時に、生産規模と労働者の給料をすぐに減らすことができないことであった。したがって、「科学的」な集約的農法を取り入れた大農園は、ほとんどが破産したのである⁽⁹⁾。

これとは逆に、自由な小規模生産者は、常に最小コストで最大の利益を上げるよう努力した。小生産者の粗放的栽培方法が、大農園の高価なルーティーンに勝利するにつれて、大農園でも集約的農法を断念して粗放の方法に変えるケースが増えていった。ただし、小生産者たちは粗放的農法に固守したわけではない。彼らは常に実験を怠らず、費用と収益のバランスに注意し、費用が穏当ならば集約的な方法を積極的に採用した⁽¹⁰⁾。

カカオ農業の特徴の1つは、処女林（未開の森林）を貪欲に切り拓くことによって発展したことである。既成の農園に新たに植えられたカカオの木は、土地の肥沃度の低下のために、多くの実を結ばないからである。カカオ栽培は、鋳山業に似て資源浪費的なものである。だから、カカオ栽培の中心地が20世紀初めに南アフリカから西アフリカに跳ぶ、ということが起こったのだ。またこの同じ理由で、カカオの供給量は不安定になり、価格が乱高下した。[図1]は、カカオ栽培の世界展開の概観を与えるものである。中南米原産のカカオの木は、ヨーロッパ人によって、

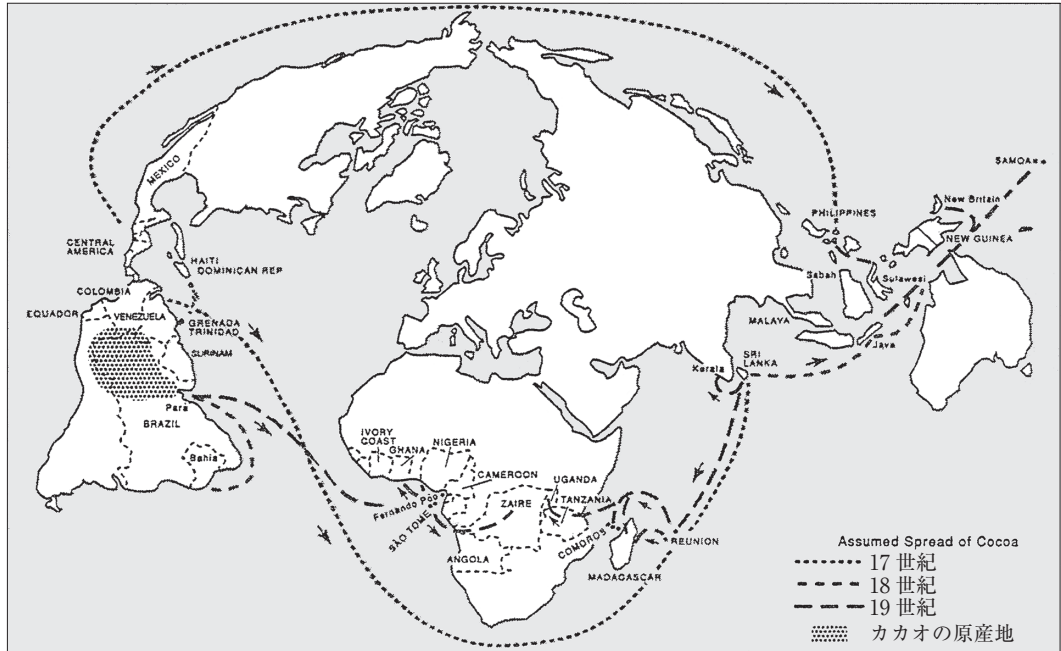
(7) Clarence-Smith, W.G., 2000, p.126.

(8) Clarence-Smith, W.G., 2000, pp.146~161, 195.

(9) Clarence-Smith, W.G., 2000, pp.146, 162; Clarence-Smith and Ruf, p.14.

(10) Clarence-Smith, W.G., 2000, pp.164, 189.

図1 カカオの世界への拡散



出典：Clarence-Smith, W.G. and F. Ruf, 1996, p.3

アジアとアフリカに移植された。フィリピンにはスペイン人が1660年代にメソアメリカのクリオロ種を導入した。また、オランダ人はベネズエラのカカオの苗木を1634年にセイロン島に持ち込み、1650年にはジャワ島に持ち込んだ⁽¹¹⁾。アフリカには、最初にポルトガル人が1830年代に、ブラジルのカカオの種子を赤道アフリカのプリンシベ島に持ち込んだ。中央アフリカと西アフリカでは、プリンシベ島からフォラストロ種カカオが拡散していった⁽¹²⁾。ガーナにカカオの種子が持ち込まれたのは、ずっと後の、19世紀後半である。カカオ栽培はガーナからコートジボワール（アイボリー・コースト）に伝播した。

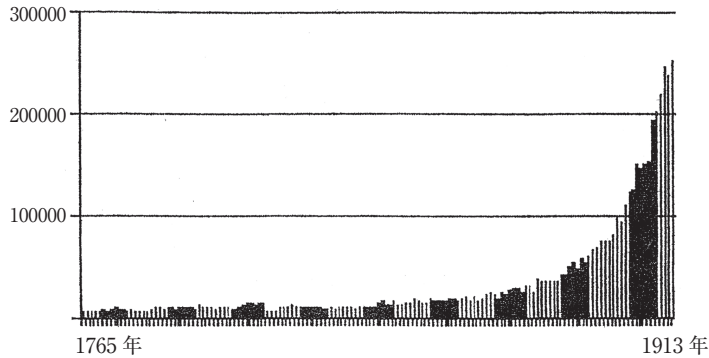
3. カカオ消費の歴史的展開

〔図2〕は世界全体のカカオ輸出量の変化を示したものである。ただし、世界全体の輸出量は世界全体の供給量とは一致しない。それは、生産されるカカオのほとんどが国内で消費されて、輸出されない地域があるからである。メキシコやフィリピンがそれであり、コロンビアでも国内生産の半分ぐらいは国内で消費された。しかし、世界全体の輸出量の変化の動向は、その生産量の動向の変化を映し出している。一見して明らかなように、世界全体のカカオの輸出量は18世紀中頃から上昇に転じ、19世紀末からは幾何級数的に上昇する。それは、カカオの消費の増加傾向を反映している。

(11) Clarence-Smith, W.G., 2000, pp.3~4, 166.

(12) Clarence-Smith, W.G., 2000, p.174.

図2 世界全体のカカオ輸出量（単位：トン）



出典：Clarence-Smith, 2000, p.233

チョコレートは、19世紀中頃までは、固形の食べ物ではなくて飲み物、つまり日本語でいうココアを意味していた。スペイン人はメソアメリカ人が飲んで冷たくさっぱりした味のチョコレート（ココア）を、砂糖とバニラとシナモンの入った温かい飲み物に変えて愛飲した。この形態のチョコレート（ココア）は、16世紀に拡大したスペイン帝国の植民地の中南米地域とフィリピンに広がり、さらにはヨーロッパ諸国の貴人たちによって愛飲されるようになった⁽¹³⁾。他方、大航海時代に東洋の各拠点に植民地を築いたポルトガル人は、紅茶とコーヒーに魅せられ、カカオを飲む習慣を持つに至らなかった。

カカオ消費量の変化には内部的要因と外部的要因がある。内部的要因とはカカオ製品の変化ないし多様化であり、固形チョコレートの発明、ミルク・チョコレートの製造方法の確立、さらには「とろけるチョコレート」の製造などであり、これらはいずれも19世紀後半にヨーロッパ人の手によって行なわれた。外部的要因とは政治的要因であり、諸国家の政府の関税政策、商業・貿易規制、国際間の紛争や国内の紛争がカカオ消費に大きな影響を与えた。

18世紀中頃までの重商主義時代には、最大のチョコレート消費圏であるスペイン帝国内で高率の輸出入関税が設定されて、正規のカカオ貿易は停滞していた。この関税障壁をかいくぐって、イギリス、フランス、オランダの商人の密貿易が盛んに行なわれた⁽¹⁴⁾しかし、1778年にスペインが帝国内での自由主義貿易政策を採用したので、世界のカカオ貿易量は増加した。スペインだけについて見ても、1770年前後に年平均3,500トンであったカカオの輸入量は、1790年代前半には年平均6,000トンに増加した⁽¹⁵⁾。フランス革命、ナポレオン戦争から中南米諸国の独立運動へと続く18世紀末から19世紀初めの政治的激動期には、カカオ貿易は停滞し、密貿易が復活してカカオ価格は激しく乱高下した。ナポレオン戦争後の経済不況期には、西洋各国で高率関税が設定

(13) Coe, S.D. and M.D. Coe, 1966, 樋口幸子訳、2017年、第4章、第5章。Clarence-Smith, W.G., 2000, pp.12~18.

(14) Clarence-Smith, W.G., 2000, p.33.

(15) Clarence-Smith, W.G., 2000, pp.6, 38. 1700年にカルロス2世が死去して、アンジュー家のフィリップがフェリペ3世としてスペイン国王となった。これによってブルボン朝スペインが始まった。1750年に王位に就いたカルロス3世は自由主義的な「ブルボン改革」を進めた。その一環が1778年のスペイン帝国内の貿易自由化であった（二村・野田・牛田・志柿、2006、332頁）。

されたので、カカオの正規の貿易は停滞した。また、1820年代以後スペインから独立した旧植民地の国々は、輸出関税を引き上げて、結果的にカカオ貿易を妨害した⁽¹⁶⁾。

次に内部的要因について見よう。チョコレート製造の機械化は19世紀初頭からフランスを中心に始まったが、チョコレート市場の低迷のために、機械化の効果はあまりなかった⁽¹⁷⁾しかし1850年頃からヨーロッパ諸国の関税や通商規制は弱まって、カカオ生産は緩やかに増加していった⁽¹⁸⁾。それでも、チョコレートの消費量は、茶やコーヒーのそれに遠く及ばなかった。1880年頃に全世界で約5億人が茶を飲み、約2億人がコーヒーを飲んだが、チョコレート（ココア）を飲んだのは約5千万人に過ぎなかった⁽¹⁹⁾。特にヨーロッパでは、チョコレートはあまり飲まれなかった。その原因の1つはイデオロギー的なものであり、チョコレートがカトリシズム、バロック文化、貴族趣味と結び付けられてイメージされたからである。もう1つの理由は、チョコレートが茶やコーヒーに比べて高価だったからである。イギリスなどではそれは、健康飲料や薬品として販売されていた。

しかし19世紀末からカカオ消費量は劇的に増加する。その原因は西欧においてチョコレート生産技術が展開し、カカオ製品が変化し、多様化したからである。まず1828年にオランダのファン・ハウテン（英語読みでヴァン・ホーテン）が粉末ココア製法の特許を取得した。従来のココアは、カカオマスに澱粉、砂糖、バニラなどを混ぜたものであり、カカオマスに含まれる油脂のためにやや飲み難くかった。ファン・ハウテンは特製の圧縮機でカカオ原液の中の油脂の大部分を取り除いて、残った固形分から粉末状の純正ココアを作ることに成功した。さらに彼は1860年代には、カカオ豆を焙煎する前にアルカリ塩を添加して、液体と混じり易くて味が滑らかなココアを作る製法（ダッチング）を開発した。

またイギリスで1847年にフライ社がココア製造の動力に蒸気機関を導入してから、西ヨーロッパでは蒸気機関によるココアの大量生産が広がった。食べ物としての固型チョコレートはこの頃にはすでに存在し、フランス人やスイス人によって品質の改良が進められていたが、1870年代後半にスイス人ダニエル・ペーターがミルク・チョコレートを開発して1878年のパリ万博に出展した。さらに翌1879年にはスイス人ルドルフ・リントが「コンキング法」によって「とろけるチョコレート」を開発した。「とろけるチョコレート」はパンや菓子に添加できるので、食べるチョコレートの消費量は急激に増加した⁽²⁰⁾。さらに20世紀の欧米では、チョコレートは巨大な工場によって大量生産される大衆消費財となった。こうして、欧米ではチョコレートは貴人の高価な飲み物から、労働者の日常的な安価な飲み物と食べ物に変化した。ただし、欧米のチョコレート・ブームは、世界のその他の地域では模倣されなかった。スペインと、かつてその植民地であった地域では、油脂分の多い飲料チョコレート（カカオ）が長く愛飲されてきたのである⁽²¹⁾。

世界全体のカカオ輸入量は1870年から1897年の間に9倍に増加したのだが、これはカカオの主要な市場の変化を伴った。[表1]は1885～1914年の主要国のカカオ輸入量を表示したものであ

(16) Clarence-Smith, W.G., 2000, pp.46, 51～52.

(17) Clarence-Smith, W.G., 2000, pp.69～71.

(18) Clarence-Smith, W.G., 2000, p.53.

(19) Clarence-Smith, W.G., 2000, p.23.

(20) 山本, 2019, 42～43頁。Clarence-Smith, W.G., 2000, p.77.

(21) Clarence-Smith, W.G., 2000, pp.28～31.

表1 主要国のカカオ輸入量（単位：千トン）

国	1885	1890	1895	1900	1905	1910	1914
USA	5	8	13	18	32	47	78
Germany	3	6	10	19	30	44	54
Netherlands	1	n.a.	3	6	11	19	32
UK	7	9	14	20	20	25	30
France	12	14	15	18	22	25	26
Switzerland	1	n.a.	2	4	5	9	10
Spain	7	8	7	5	6	6	7
Austria			1	2	3	5	7
Russia			1	2	2	4	4
Belgium			2	2	3	5	3
Canada					1	1	3
Italy	n.a.	n.a.	1	1	1	2	2
計	n.a.	n.a.	71	98	140	199	267

Sources: Food and Agriculture Organisation 1995: Hall 1914: 405; PP 1886, vol. 69: *Gordian*: 4198; *Historicus* 1896, 48; Hart 1911: 244-5

注：計はその他を含む。

出典：Clarence-Smith, 2000, p.56.

るが、一見してわかる通り、スペインのカカオ輸入量はこの期間に停滞している。それはスペインで消費される製品が不変だったからである。1870年代以後、スペインを抜いて世界最大のカカオ輸入国になったのは、フランスであった⁽²²⁾。チョコレート製造の機械化が最も早く始まったフランスは、ダーク・チョコレートとその詰合せに特化し、その高級チョコレート製品は欧米中で認められるようになった⁽²³⁾。しかし20世紀初めには、アメリカ合衆国が世界最大のカカオ輸入国になった⁽²⁴⁾。合衆国ではウォルター・ベイカー社が輸入カカオの半分以上を買っていたが、合衆国は1894年に制定された高率関税に守られた豊かな国内市場を持っており、1900年にはカカオ豆を加工する企業は112社、チョコレートを使用する企業まで含めると1914年には2,391の企業が存在していた⁽²⁵⁾。また、イギリスでも1870年と1910年の間にカカオの消費量は6倍に増加した。

このようなカカオ輸入量の急増は、カカオ栽培前線のグローバルな展開に基づく生産量の増大によってもたらされた。18世紀中頃から20世紀初めまでに、[表2]に明らかなように、カカオ生産の中心地は、メソアメリカから南米（ベネズエラ、エクアドル、トリニダード、ブラジルのバイヤなど）へ、さらには中央アフリカのサントメ・プリンシペ両島、カメルーンなどから西アフリカのガーナへ、さらにはコートジボワールへと移っていった。このようなカカオ栽培前線の展開は、何故、またどのように起こったのだろうか。

(22) Clarence-Smith, W.G., 2000, p.53.

(23) Clarence-Smith, W.G., 2000, p.83.

(24) Clarence-Smith, W.G., 2000, p.56

(25) Clarence-Smith, W.G., 2000, p.82.

表2 世界各地のカカオ輸出量の推移（単位：トン）

	1765年	1785年	1805年	1825年	1845年	1865年	1885年	1895年	1905年	1914年
トリニダード・トバゴ	7	21	239	1,252	1,147	2,999	6,228	13,363	21,962	28,780
ベネズエラ	2,750	4,000	6,000	2,500	3,483	1,812	6,691	7,112	11,661	16,887
エクアドル	1,118	1,914	2,394	3,316	4,475	6,563	11,832	17,547	21,724	47,210
ブラジル	464	512	1,671	1,545	1,950	3,195	6,214	10,846	21,090	40,767
ガーナ								13	5,620	53,735
カメルーン								132	1,413	3,200
サントメ・プリンシペ							1,200	7,023	25,660	32,064
世界全体	6,162	8,727	11,466	9,259	12,237	18,256	40,689	74,185	149,618	279,867

出典：Clarence-Smith, 2000, pp.234～239

4. カカオ栽培前線のメソアメリカから南米への展開

カカオ栽培が古くから行なわれていた地域は、前述のように、メソアメリカ（中米）であるが、カカオ栽培前線は18世紀初めから19世紀末までに、カリブ海地域、アンデス北部（コロンビア、ベネズエラ、エクアドル）、アンデス中部（ペルー、ボリビア）、そしてブラジルのパハア州へと展開していった。中南米の原住民はインディオであるが、彼らは征服者たちの過酷な収奪や、征服者たちがヨーロッパからもたらした麻疹や天然痘などの伝染病のために、急激に数を減らしていった。例えば、スペイン人が征服した時のインカ帝国の人口は約1,100万人であったが、それが征服の約40年後には150万人に減少していた⁽²⁶⁾。インディオの減少による労働力不足を補うために、さらには綿花や砂糖黍などの商品作物の栽培に必要な大規模な労働力を調達するために、ヨーロッパ人はアフリカから大量の黒人奴隷を輸入した。16世紀初めから1880年代までにアフリカから輸出された黒人奴隷は約1,200万人で、そのうち約1,000万人が大西洋上の過酷な航海を生き延びて新大陸に陸揚げされた、といわれる⁽²⁷⁾。そのために中南米には、白人、植民地で生まれた白人であるクリオーリョ、白人とインディオの混血であるメスティーソ、インディオ、白人と黒人の混血であるムラート、そして黒人からなる階層社会が形成された。ただし、その人種構成比率の内訳は、国と地域によって大いに異なる。

スペインでは1760年代から「ブルボン改革」による帝国経済の再建が試みられたが、フランス革命後、スペイン王国はナポレオンと手を結んでイギリスと戦い、トラファルガー沖の海戦で大敗して大西洋の制海権を失った。さらに1808年にスペイン国王はナポレオンによって退位させられた。この宗主国の危機に乗じて、スペイン領植民地のクリオーリョが独立運動を引き起した。メキシコは1821年に独立を達成し、中米では、メキシコへの併合を選択したチアパスを除く地域が1824年に「中米連合」を結成した。この「中米連合」は最終的に1839年に崩壊して、幾つかの独立国家が成立した。アンデス北部では、シモン・ボリバルが率いた解放戦争のさなかの1819年に「グラン・コロンビア共和国」が成立したが、これも1830年に崩壊して、ベネズエラ、エクア

(26) 中川・松下・遅野井、1985、25頁。

(27) 二村・野田・牛田・志柿、2006、326頁。

ドル、コロンビアが分離して独立国となった⁽²⁸⁾。旧スペイン領植民地の中では、キューバとプエルト・リコだけが19世紀末まで植民地として留まった。他方、ナポレオンに攻め込まれたポルトガル国王は、王室ごとブラジルに逃げ延びて、1808年にリオ・デ・ジャネオロに首都を置いた。1821年に王室はポルトガルに戻ったが、王子ドン・ペードロは翌年12月にここにブラジル帝国を建国した⁽²⁹⁾。

前述のように、イギリスとその植民地では1833年に奴隷制が廃止されたが、フランスでも1848年に第二共和制政府がフランス領における奴隷制の廃止を宣言した⁽³⁰⁾。スペインから独立した中南米諸国でも、政権を握った自由主義者たちが黒人奴隷を解放するとともに、インディオの村落共同体を解体していった。解放奴隷の多くは農業労働者になったが、一部の者は自営農民になることができた。インディオ村落共同体の解体は、インディオに土地所有権を与えて自営農民化することを目的としていたが、現実には、白人系大農園主が彼らの土地を奪って、彼らを農奴化するために利用されていった⁽³¹⁾。スペイン植民地のプエルト・リコでは1873年に、キューバでは1886年に、そしてブラジルでは帝政末期の1888年に奴隷制が廃止され、新大陸の奴隷制は完全に廃止された⁽³²⁾。ただし、インディオの強制労働はメソアメリカなどで形を変えて存続した。

A) メソアメリカ

〔図3〕はメソアメリカの主要な地名を表記した地図である。ここでは、はじめ、先住民がスペイン人のエンコミエンデロス（領主に転化した征服者）にカカオを貢納していた。やがてエンコミエンダ制が廃止されると、先住民はスペイン王室にカカオを貢納した。植民地の社会構造は16世紀末にはほぼ完成した。スペイン風の都市とスペイン人のアシエンダ（大農園）が形成され、その周縁に貢納とレパルティミエント（労働割当）制に縛られたインディオ村落共同体が存在する構造が、植民地時代末まで存続した。スペイン人たちは大農園制のクリオロ種カカオの栽培を、鉄器とラバと新たな灌漑方法を導入して、太平洋側に拡大していった。カカオ栽培は1540年から75年頃にブームを迎えた⁽³³⁾。1730年代以後、メソアメリカでは藍の栽培が盛んになったが、18世紀後半にはメキシコ南部からニカラグア、コスタ・リカに至るメソアメリカの先住民はカカオ栽培を続けていた。特にタバスコのチョンタル・マヤ族は1770年代に広大な土地の所有権を得て、カカオ農園を拡大した⁽³⁴⁾。

しかしメソアメリカのカカオ栽培は、その後衰退する。ニカラグアのクリオロ種カカオは、1846年の旱魃で全滅し、タバスコのクリオロ種カカオは、害虫と病気におかされて1854年に約400万本あった木が1890年には約300万本に減少した⁽³⁵⁾。1870年代以後のメソアメリカでは、輸

(28) 中川・松下・遅野井、1985、33～42頁；二村・野田・牛田・志柿、2006、186～189頁。

(29) 斉藤・中川、1978、104～117頁。

(30) 二村・野田・牛田・志柿、2006、345～348頁。なお、フランス領ハイチでは、フランス革命時に奴隷解放が行なわれ、1804年に黒人独立国家ハイチ共和国が成立した（二村・野田・牛田・志柿、2006、341～344頁）。

(31) 中川・松下・遅野井、1985、46頁。

(32) 斉藤・中川、1978、148～154頁；二村・野田・牛田・志柿、2006、348～351頁。

(33) Clarence-Smith, W.G., 2000, p.165；二村・野田・牛田・志柿、2006、183頁。

(34) Clarence-Smith, W.G., 2000, p.130；二村・野田・牛田・志柿、2006、185頁。

(35) Clarence-Smith, W.G., 2000, pp.171, 175.

図3 メソアメリカの主要地名



出典：Clarence-Smith, 2000, p.252

出用商品作物としてのコーヒー栽培がブームを迎えた⁽³⁶⁾。メキシコのチアパス、コスタ・リカ、ニカラグアとグアテマラでも、政権を握った自由主義的「改革者」たちは、先住民の農村共同体を解体して彼らを「自由」にするとともに、その土地を大農園主に売却し、外国人による大農園経営を優遇する政策を採った⁽³⁷⁾。

メキシコ南部チアパスのインディオの過酷な運命については、多くのことが語られている。彼らは1890年代以後の「自由主義的改革」の結果、農村共同体を破壊されて有核村落に移住させられたばかりではなく、その多くが債務奴隷 peon として使役された。自らの権利について無知な先住民たちは、前金支給、罰金などのからくりによって農園主の債務奴隷になった。そして彼らは、農園主の間で債務の移譲を通して売買された。ついに農園で暴動が頻発するようになり、報道機関がその実態を告発した。そして1914年にはチアパスの革命政府が、債務奴隷のすべての債務を帳消しにして、彼らを解放したといわれる⁽³⁸⁾。しかし、それが真の意味の解放にならなかったことは、20世紀末まで、この地域で暴動の頻発が続いたことによって、明らかである⁽³⁹⁾。

B) ベネズエラ

〔表2〕で明らかなように、ベネズエラは18世紀後半における世界最大の 카카오 輸出地域であ

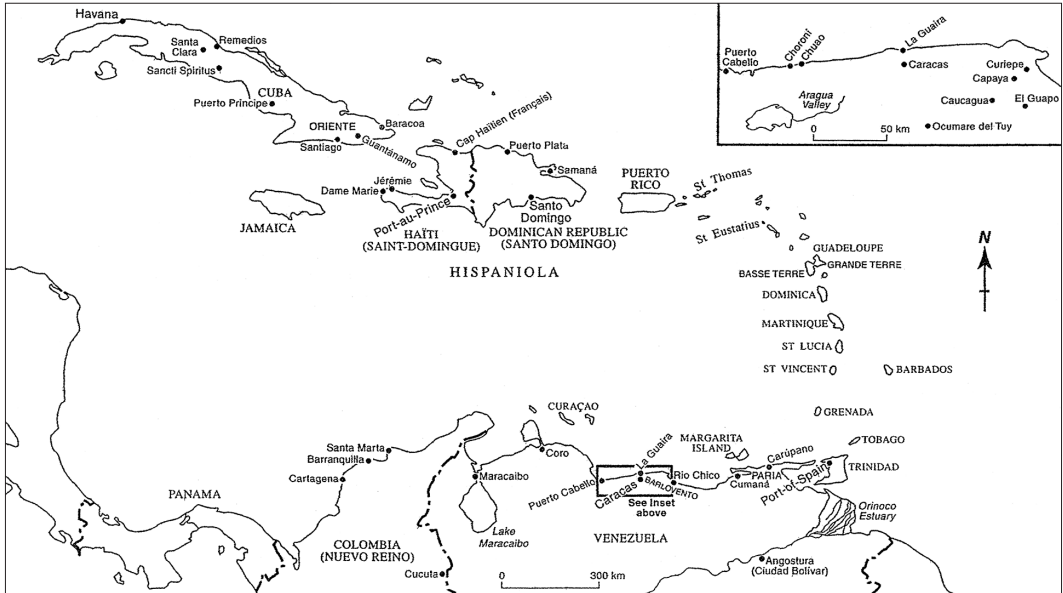
(36) 二村・野田・牛田・志柿、2006、194～196頁。

(37) Clarence-Smith, W.G., 2000, p.148.

(38) Clarence-Smith, W.G., 2000, p.224.

(39) Benjamin, T., 1989.

図4 カリブ諸島とベネズエラの主要地名



出典：Clarence-Smith, 2000, p.253

り、その額は世界全体の輸出額のほぼ半分を占めていた。1830年頃から1930年頃まで、カカオはコーヒーに次ぐベネズエラ第2の輸出品だった⁽⁴⁰⁾。1814年以後ベネズエラはカカオ輸出額においてエクアドルに追い越され、以後輸出額は低迷するが、1870年代から再び増加傾向を見せる。これはカカオ栽培の中心地が西部のカラカスやバルロヴェントからバリア半島地域に東進した結果である。地名については「図4」を見ていただきたい。1924年にはバルロヴェント地域とバリア地域が、ベネズエラ地域からのカカオ輸出のそれぞれ4割を占めた⁽⁴¹⁾。1885年にベネズエラはエクアドルに次ぐ世界第2のカカオ輸出国であった。1914年までにそのカカオ輸出額は約2.5倍に増加したが、世界全体におけるその地位は「表2」に明らかのように、世界第6位に後退した。

ベネズエラのエンコミエンデロスたちは16世紀末以後、先住民の労役を利用して森林を開墾してカカオ農園を拓いた⁽⁴²⁾。彼らはクリオロ種カカオを輸入して、集約的に栽培した。18世紀後半には、ベネズエラ西部のカラカス周辺でアフリカ黒人奴隷労働を使用する輸出用カカオ栽培の大農園が発展した⁽⁴³⁾。1790年代においてメキシコでは年平均約2,500トンのカカオが生産されたが、それはすべてメキシコ内部で消費された。これに対して、同時期のベネズエラで生産されたカカオの国内消費量は年平均1,600トンに過ぎず、その3倍の4,840トンがヨーロッパ市場向けに輸出されたのである⁽⁴⁴⁾。

ベネズエラでは、小規模カカオ生産者も多数存在した。1787年の調査によるとカラカス州では

(40) Vallenilla, N. H., 1996, p.26.

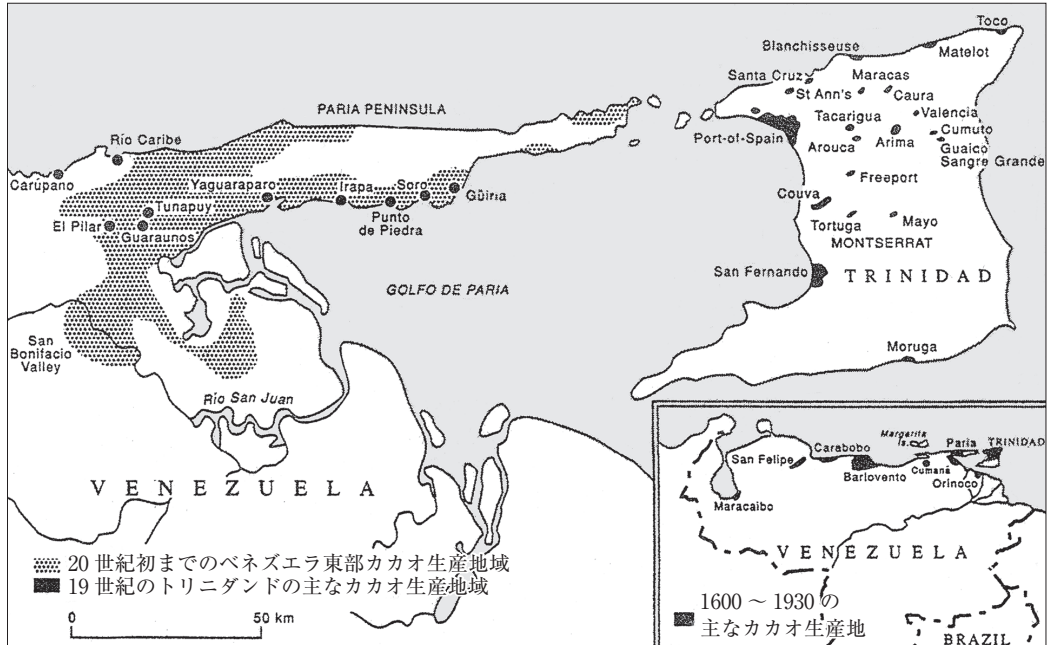
(41) Vallenilla, N. H., 1996, p.27.

(42) Clarence-Smith, W.G., 2000, p.127.

(43) Clarence-Smith, W.G., 2000, pp.129,164, 197.

(44) Clarence-Smith, W.G., 2000, p.35.

図5 ベネズエラ東部とトリニダード島のカカオ関連地名 (1900年頃)



出典：Valleralla, N.H., 1996, p.24

多数の不法土地耕作者 squatters がカカオを栽培していたが、その多くはメスティーソだった。またカナリア諸島からの移民がバルロヴェントを中心に入植した⁽⁴⁵⁾。ベネズエラでは奴隷制がカカオ生産の中心であった。小規模生産者でさえも黒人奴隷労働を使用した。カラカス州だけでも奴隷の人口は19世紀初めに約6万7,700人いたが、その約半数はカカオ生産地域にいた。ただしベネズエラの奴隷は結婚して家族を持ち、自分の土地を持つことができた。また、努力して金を貯めて300ペソを主人に払えば、必ず奴隷身分から解放されて自由を得た⁽⁴⁶⁾。

19世紀初めの早魃とイナゴ被害を契機に、カラカス周辺のカカオ生産は衰退してコーヒーと綿花栽培が広がったが、カカオ栽培前線はバルロヴェント周辺、さらには東部のパリア地区の森林に侵入していった。独立以前のベネズエラ東部では広大な森林が先住民の共有地として残されていたが、1830年の独立を経て、1848年の法律によって国有地として売却されていった⁽⁴⁷⁾。1854年の奴隷制廃止、1876～8年の内乱、1868～9年の大早魃を経て、ベネズエラのカカオ大農園は衰退し、国有地における不法土地耕作者によるカカ栽培が急増した⁽⁴⁸⁾。19世紀末には〔図5〕で示されるように、東部のパリア地域でのカカオの不法土地耕作者による栽培が激増した。1937年の国勢調査によれば、ベネズエラ東部の農地の実に67%が不法に占有されて耕作されていた⁽⁴⁹⁾。また、大農園が衰退して小生産者経営が増加するに従って、トリニタリオ種カカオの粗

(45) Clarence-Smith, W.G., 2000, pp.127, 9.

(46) Clarence-Smith, W.G., 2000, pp.197～8.

(47) Clarence-Smith, W.G., 2000, pp.136, 170; Vallenilla, N. H., 1996, p.27.

(48) Clarence-Smith, W.G., 2000, pp.141, 209.

(49) Clarence-Smith, W.G., 2000, p.149; Vallenilla, N. H., 1996, p.27.

放的栽培が一般化していった⁽⁵⁰⁾。

ベネズエラ東部パリア地域のカカオ栽培の発展については、コルシカ人商人たちが重要な役割を担った。彼らは1820年代から移住してきたが、1846年に港町カルパーノが外国貿易に門戸を開いてから、コルシカ人たちの商社はカカオ取引に専業するようになった。彼らは地元で買い集めたカカオを、スペインではなくフランスに輸出し、大西洋海底電信ケーブル、地元の電話、電気、水道などのインフラの整備にも大いに寄与し、カカオ生産者への金融活動も展開した。コルシカ人商人たちは20世紀初めまで、パリア地区のカカオ生産のオーガナイザーの役割を果たしたのである⁽⁵¹⁾。

1930年代前半には、パリア地域から輸出されるカカオの価格が急落した。その原因は、ベネズエラ産カカオが西アフリカ産のカカオとの競争に敗れたことにあった。しかしベネズエラ政府は1936年にカカオとコーヒーの栽培農家のために援助基金を創設し、カカオのマーケティングを政府が行なうこととした。そのためにコルシカ商人はカカオ取引から撤退したが、パリア地区のカカオ経済は存続した⁽⁵²⁾。

C) トリニダード

カリブ海の島々でのカカオが栽培はあまり成功しなかった。それはカリブ海の島々には、原始林が少なく、山が急勾配であり、またしばしば火山が噴火し、毎年のようにハリケーンに襲われるなどの、カカオ栽培にとって生態学的に不利な条件があったからである。しかしベネズエラの東に浮かぶトリニダード島の生態学的条件は、カカオ栽培にとって例外的に良好であった⁽⁵³⁾。神奈川県の2倍程度の面積のこの島のカカオ生産は19世紀中に順調に発展していった。トリニダード島の位置とカカオ栽培地域については〔図5〕を参照されたい。トリニダード島には、(スペインの)アラゴンのカプチン修道会の宣教師が1756年にフォラステロ種カカオを持ち込んだ、といわれる。これが地元で自生するクリオロ種カカオと交配して、新種のトリニタリオ種が生まれた⁽⁵⁴⁾。

トリニダード島で最初に発展した輸出用商品作物は砂糖黍である。これはアフリカ系の黒人奴隷を使役する大農園で栽培された。スペイン支配下の1776年にはトリニダードの総人口はわずか3,432人に過ぎなかったが、スペインの支配が終わりイギリスの植民地になった1797年には1万7,718人に増加した。その内のアフリカ系黒人奴隷の数は約1万人であり、先住民インディオの数は約5千人であった⁽⁵⁵⁾。1838年までに奴隷制は廃止されたが、イギリス人植民地官吏と大農園主たちは解放奴隷を賃金労働者につなぎとめる方針を採った。また1851年以後、大農園主たちは、東インドから5年契約の年季奉公労働者を大規模に受け入れ、彼らに住居、食糧、医療サービスを無償で与えた⁽⁵⁶⁾。

(50) Clarence-Smith, W.G., 2000, pp.173, 180.

(51) Vallenilla, N. H., 1996, pp.27~34.

(52) Vallenilla, N. H., 1996, p.40.

(53) Clarence-Smith, W.G., 2000, p.172.

(54) Clarence-Smith, W.G., 2000, p.168.

(55) Clarence-Smith, W.G., 2000, p.199.

(56) Clarence-Smith, W.G., 2000, pp.210, 6.

トリニダード島で1838年において耕地として利用されていた土地は約4万エーカーに過ぎなかったが、他方で100万エーカー以上の未開の王領地があった。ここに解放奴隷が不法侵入して小面積でカカオを栽培する動きが加速化したので、植民地当局の中には不法土地耕作者に王領地を買い取らせて小農民化させるべきだ、という政策を支持するグループが生まれた。他方で砂糖黍を栽培する大農園主からは、640ないし900エーカーという大きな単位で王領地を分譲してほしいという要請があった。したがって19世紀中頃以後は、王領地の譲渡を巡って大農園主と小規模農民との間の駆け引きが繰り返された⁽⁵⁷⁾。

1859年にはトリニダードの全耕地面積の約50%を砂糖黍畑が占め、カカオ栽培地は約12%を占めており、1870年頃までこのような状況は変わらなかった。その背景には、イギリス本国での砂糖消費量が1840年から70年までの間に約3倍に跳ね上がった、という事情もある。しかし1867年以後に王領地の売却は加速化した。砂糖価格の暴落と、本国イギリスを含む欧米でのカカオ消費の急増の結果、トリニダードのカカオ輸出は増加したが、その推進主体は大農園主ではなく、増加する小農民たちであった。[表2]に明らかのように、1905年にはトリニダードはサントメ・プリンシペ、ブラジル、エクアドルと並ぶ世界の4大カカオ輸出地域の1つになったのである。トリニダードのカカオ・ブームが終わるのは1920年頃であるが、この時点でも同島には未開の森林が多く残されていた⁽⁵⁸⁾。ブームの終焉は森林の枯渇によるのではなく、同島のカカオが西アフリカ産のカカオとの価格競争に敗退したことによるのである。

D) エクアドル

エクアドルのカカオ輸出量は1814年にベネズエラのそれを追い越し、1911年にガーナに追い越されるまで、1世紀近くも世界第一であり続けた⁽⁵⁹⁾。マイグアシュカはエクアドルのカカオ経済がこの間に2つの段階を経たという。エクアドルは1830年に独立し、1840年に元の宗主国であるスペインとの通商条約を締結し、以後1890年頃まで専らスペイン向けにカカオを輸出した。しかしそれ以後、欧米諸国のカカオ需要が急増したので、エクアドルからの輸出も北西ヨーロッパ向けが急増した。エクアドルはカカオ栽培の大農園が発展した国であるが、地元出身の大農園主に代わって、1890年頃からは外国出身の国際的なネットワークを持つ新しいタイプの農園主が支配的になったのである⁽⁶⁰⁾。

エクアドルのカカオ栽培は、港町グアヤキル周辺から始まった。地元で高品位のフォラステロ種（アリバ種）が自生しているのが発見されたからであり、農園主はこれを粗放的に栽培した⁽⁶¹⁾。土地は町議会から容易に入手でき、30年以上平和裏に土地を占有すれば所有権が確定し

(57) Lewis, K. P., 1996, pp.45~48, 53~61. 奴隷制廃止後、トリニダードの地主たちは広く請負制を採用したが、これは後述のエクアドルで行われた請負制のそれとはかなり異なる。トリニダードでは、農園主が日雇い労働者を雇って森林を拓き、排水施設を作る。請負人は前金と種子を受け取って、約4ヘクタールの土地を受け持って、日雇い労働者を雇って農園の開墾を完成させてカカオを栽培する。契約満了時（カカオが実を結ぶ頃）に請負人は、生育したカカオの木の本数に応じて謝礼を受け取る（Clarence-Smith, W.G., 2000, p.215）。

(58) Clarence-Smith, W.G., 2000, p.179.

(59) Clarence-Smith, W.G., 2000, Appendix2, pp.234~244.

(60) Maiguashca, 1996, pp.66~74.

(61) Clarence-Smith, W.G., 2000, p.165.

たので、当初は中小規模の農園が多数存在した。しかし19世紀中にカカオへの需要が増加するにしたがって、カカオ栽培地域はアリバ、バラオ、マチャバ、マニバといった周辺の森林地域に拡大し、大規模な農園が増加した⁽⁶²⁾。大農園の労働者は永年労働者と日雇労働者からなり、その主力はメスティーソの自由民であって、黒人奴隷は少なかった。また、高地では農園主は先住民を債務懲役制度 *debt peonage* を悪用して使役した⁽⁶³⁾。

世界的にカカオ需要が急増した19世紀末には、野心的な企業家たちが未開森林を切り開いて大農園を所有した。その多くは外国出身者で、スペイン、ペルー、コロンビア、チリ、イタリアと多様であった。彼らはあらゆる手段を駆使して土地集積に邁進した。そしてエクアドルで富を蓄えると、地元の有力者と姻戚関係を結んで地元のエリートとなり、政治的影響力を確保し、地元のカカオ経済を支配した。1890年代末には、20の互いに姻戚関係のある家族が、主要なカカオ栽培地域の最良の土地の70%を所有していた⁽⁶⁴⁾。これらの新たなタイプの大農園主のほとんどは1代で巨万の富を得た「成り上がり者」であったが、その子孫は不在地主化し、また金利生活者化していった。

バスク人植民地官僚の子孫であるアスピアズ家とペルー人の子孫のセミナリオ兄弟は「世界のカカオの無冠の帝王たち」だった。彼らはプーガ家、ヂュラン＝バラン家、カアマン家の人たちと共に、ロンドンとハンブルクに合本会社を設立した。100ほどの地主家族が避暑地に別荘を持ち、12家族ほどがヨーロッパで豪華な生活をした⁽⁶⁵⁾。彼らはカカオ・ブームによって得た富を、エクアドル国内の産業に投資することもなかった。実際、20世紀初めのエクアドルのカカオ取引は外国人仲買商、銀行業はコロンビア人、軽工業はイタリア人、装飾品生産はシリア＝レバノン人に牛耳られていた⁽⁶⁶⁾。マイグアシュカは「もし仮に、カカオ農園主たちが国内産業にもっと多くの投資をしていたならば、エクアドルでも、同時期にコロンビアが経験したような工業化が進展していたことであろう」と批評する⁽⁶⁷⁾。

新しいタイプの農園主たちが採用した農地制度は請負制であった。農園主は経験ある家族持ち男性を請負人に選んだ。請負人は労働過程のすべてを管理し、必要に応じて日雇い労働者を雇った。請負人は未開の森を開墾し、カカオの種子を蒔いて緑陰樹を植えた。請負契約は5～6年、つまりカカオの木が実を結ぶ前までである。契約満了時に請負人は生育したカカオの木の本数に応じて、地主から謝礼を受け取った。その後の管理を農園主は農園管理人に任せた。管理人は少数の永年労働者を管理し、また年2回の収穫時には季節労働者を雇用した。1893年のエクアドルのカカオ農園の労働者数は、およそ1万5,000人だった⁽⁶⁸⁾。

カカオ需要が増大するにつれて、エクアドルのカカオ栽培前線はグアヤス平野からアンデス山麓に進出し、カカオ農園の管理は杜撰になっていった。1917年頃のカカオ栽培地については、[図6]を参照されたい。第一次世界大戦後、降雨量の一年中非常に多い山麓に栽培前線が広が

(62) Clarence-Smith, W.G., 2000, pp.129, 137; Maiguashca, 1996, pp.68～71.

(63) Clarence-Smith, W.G., 2000, pp.200～1, 206; Maiguashca, 1996, p.70.

(64) Maiguashca, 1996, p.74.

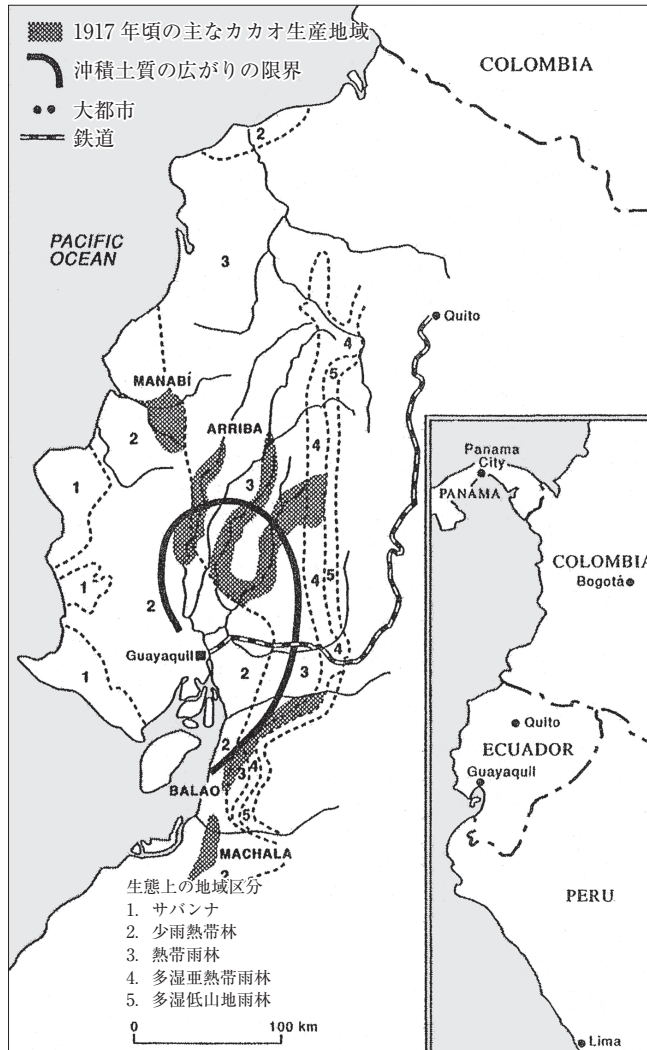
(65) Clarence-Smith, W.G., 2000, p.147.

(66) Maiguashca, 1996, p.73.

(67) Maiguashca, 1996, p.83.

(68) Clarence-Smith, W.G., 2000, pp.213～5.

図6 エクアドル西部のカカオ生産地域（1917年頃）



出典：Maignashca, J., 1996, p.69

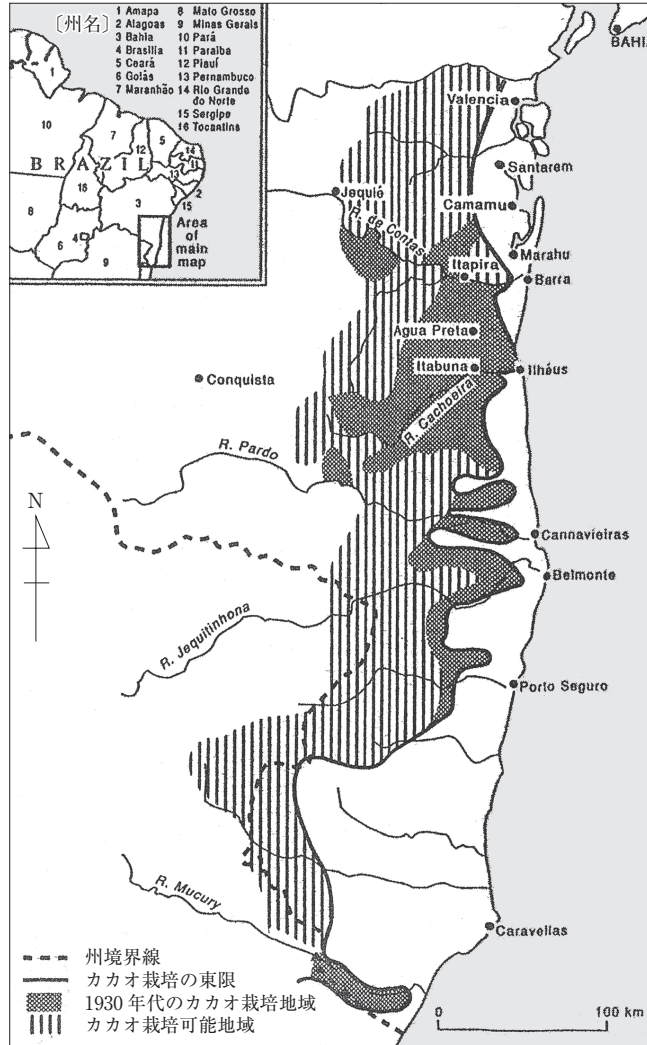
ると、カカオの木にモリアニ菌が発生し、1923年までにこれが全国に蔓延した。さらに、天狗巣病 witches' broom が全国のカカオ農園に広がって、エクアドルのカカオ経済は崩壊した⁽⁶⁹⁾。

E) バイヤ

ブラジルの輸出用農産物としてはコーヒーが有名である。ブラジルのコーヒー栽培は南部のサンパウロ州で1790年頃に始まり、1850年前後に本格的に発展したが、この時点でブラジルのコーヒー生産額は世界生産額の約45%を占めていた。サンパウロ州の気候は一年のうちの半分が雨季で残りが乾季であってコーヒー栽培に適しており、テーラ・ロッサ土壤という非常に肥沃な土壌にも恵まれていた⁽⁷⁰⁾。他方ブラジルのココア・ブームは、もう少し北の中部大西洋岸のバイ

(69) Clarence-Smith, W.G., 2000, pp.178~9; Maignashca, 1996, pp.78~81.

図7 ブラジル・バヒアのカカオ生産地帯（1930年頃）



出典：Greenhill R. G., 1996, p.89

ヤ州の熱帯雨林地域で1890年代以後に展開した。[図7]を参照されたい。1900年にはブラジルのカカオの約8割がバイヤで栽培されて積み出されたが、[表2]に明らかなように1914年にはブラジルのカカオ輸出量は約4万トンに達し、バイヤは世界有数のカカオ産地となった。

バイヤ州南部では18世紀末から奴隷労働力に依存したカカオ農園経営が存在していた。先住インディオの狩猟民は密林開拓者の侵入を嫌って、これを攻撃したので、1830年代から開拓者たちは最新の火器を使って、パルド川の南まで「人種浄化」運動を展開した⁽⁷¹⁾。そして、捕えた先住民を奴隷として使役した。ブラジル政府は1850年にアフリカ系奴隷の輸入を禁止したが、その

(70) 斉藤・中川, 1978, 182～7頁。ブラジルのアマゾン河流域はカカオの原産地であり、ここでは20世紀初めまで先住民によるカカオ採取が行なわれていた。しかし、交通の便が悪く、人口密度が希薄だったので、地政学的にカカオ栽培に向いていなかった。

(71) Clarence-Smith, W.G., 2000, p.138.

後も密輸入が続いた。バイヤ州の港町イルヘウスはアフリカ系黒人奴隷の密輸入港として栄え、バイヤ南部のカカオ農園では奴隷制は一般的になった。しかし19世紀後半からは、他地域からメスティーソの自由労働者が大量に移住してきて農園で働き、あるいは森林に不法侵入して小規模カカオ生産農民になっていった⁽⁷²⁾。

19世紀末には欧米でカカオ需要が急増したが、ブラジル政府による1888年の奴隷制廃止は同国のカカオ経済にとっても重要な意義を持った。奴隷制大農園が経営できなくなった農園主たちは新しい農園経営のあり方を模索した。他方、解放された奴隷たちは、自らの意志で自由に移動し始めた。周辺地域の解放奴隷が大挙してバイヤに流入したことが、同地域のカカオ栽培を活気づけるとともに、変化させたのである⁽⁷³⁾。

バイヤ州政府は1893年の狩猟先住民の蜂起を武力によって制圧して、狩猟先住民をほぼ絶滅させた。1897年の同州の土地法は、先住民の土地を州に帰属するものと宣言したが、そこに解放奴隷や他地域からの移民が大挙して流入し、森林地を不法に占拠してカカオを栽培した⁽⁷⁴⁾。これらのバイヤの小農民たちは、カカオを粗放的に栽培し、粗放的に処理した⁽⁷⁵⁾。他方、クラレンス＝スミスによれば、農園主たちは請負制を導入した。請負農民たちは農園主から前金を貰って森林を拓き、カカオを栽培して、5年後に生育したカカオの本数に応じて謝礼を受け取った⁽⁷⁶⁾。またグリーンヒルによれば、多くの農園主はその土地を小作人に分益小作させた⁽⁷⁷⁾。

バイヤでのカカオの流通は、多くの仲介商が介在する長大で複雑な樹枝状をなしており、ブラジル人だけではなく、ポルトガル人やシリア＝レバノン人によっても担われた⁽⁷⁸⁾。特に1860年代にバイヤ州に大挙して移入した1,000人を超えるポルトガル人が、カカオ流通に従事して仲介業を牛耳った⁽⁷⁹⁾。他方、輸出業務はドイツ系商社に握られて、20世紀初めにはバイヤ産のカカオの約4割がハンブルク港に輸出された⁽⁸⁰⁾。第一次世界大戦後には、西アフリカ地域との価格競争が熾烈さを増し、バイヤの短いカカオ・ブームは終わりを告げた。第一次世界大戦による混乱とドイツ市場の喪失がバイヤのカカオ経済の没落に追い打ちをかけた⁽⁸¹⁾。

5. カカオ栽培前線の赤道アフリカから西アフリカへの展開

赤道アフリカ（サントメ・プリンシペ両島、赤道ギニア、カメルーンなど）と西アフリカ（ナイジェリア、ガーナ、コートジボワールなど）、そして東アフリカ（マダガスカルとタンザニアなど）には、それぞれ別の時期に、別の経路で中南米からカカオの種子や苗木が持ち込まれた。19世紀末からは赤道アフリカでカカオ生産が発展したが、第一次世界大戦後には西アフリカでカ

(72) Clarence-Smith, W.G., 2000, pp.142, 211~2.

(73) 齊藤・中川, 1978, 141~58頁; Greenhill, R. G., 1996, pp.87~8.

(74) Clarence-Smith, W.G., 2000, pp.150~151.

(75) Clarence-Smith, W.G., 2000, p.191.

(76) Clarence-Smith, W.G., 2000, p.217.

(77) Greenhill, R. G., 1996, p.90.

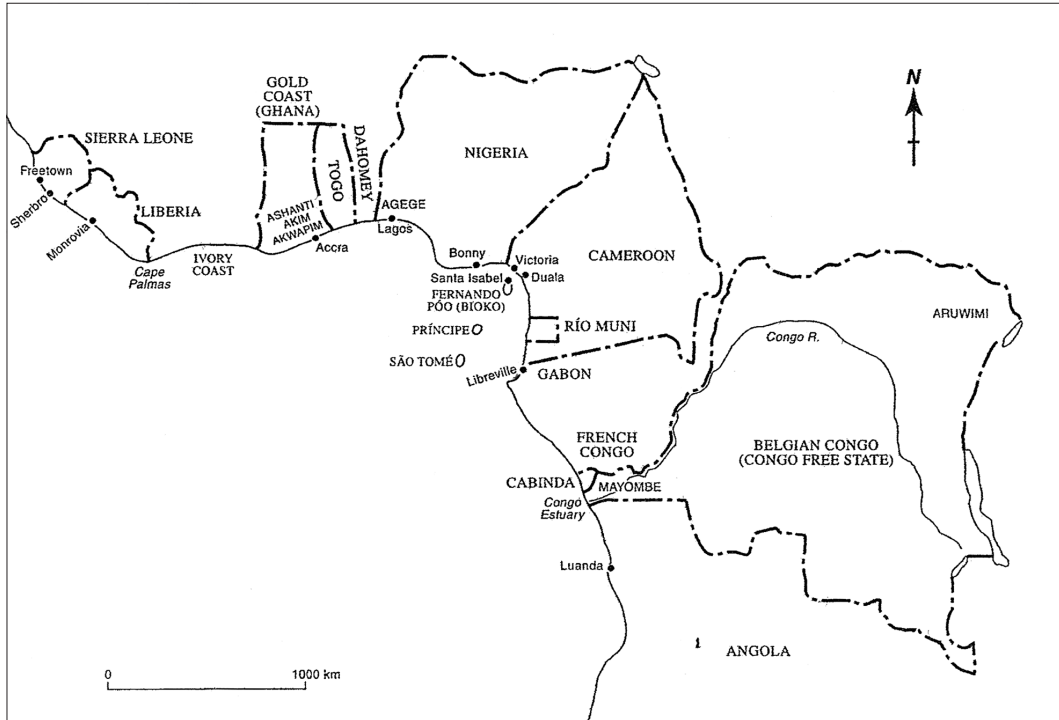
(78) Greenhill, R. G., 1996, p.93.

(79) Clarence-Smith, W.G., 2000, p.114.

(80) Greenhill, R. G., 1996, pp.93, 95, 98.

(81) Greenhill, R. G., 1996, p.102.

図8 赤道アフリカと西アフリカのカカオ関連地名



出典：Clarence-Smith, 2000, p.256

カオ生産が大発展して世界最大のカカオ生産地域となった。他方東アフリカでは主に地元で消費される高品質クレオロ種カカオが生産された。

1914年までの赤道アフリカのカカオ栽培は、強制労働を使用する大農園によって支配された。カカオ栽培地の地名については、[図8]を参照されたい。西アフリカのカカオ・ブームは赤道アフリカよりも数十年遅れて始まった。この地域を世界のカカオ栽培の中心地にしたのは、外部から来た大農園主ではなく、アフリカ人小規模生産者たちであった。ヨーロッパ人たちは大農園を設立したが、どれも無残に敗北した⁽⁸²⁾。

F) サントメ・プリンシペ両島

赤道アフリカの大西洋上に浮かぶサントメ・プリンシペ両島は熱帯雨林と山から成る島であって、両島合せたその面積は日本の佐渡島の程度である。しかし両島は20世紀初めには世界有数のカカオ生産地になった。1470年にサントメ島に渡来してこれを植民地としたポルトガル人は、ここに黒人奴隷を移住させて砂糖黍の栽培を始めるとともに、両島を奴隷貿易の中継地とした⁽⁸³⁾。ポルトガル人は、1822年にブラジルが独立すると、同年中にカカオの苗木をプリンシペ島に運んで、奴隷を使用して大農園でカカオ栽培を始めた⁽⁸⁴⁾。ただし、1880年頃までは、小規模カカオ農民も両島には多数存在していた。

(82) Clarence-Smith, W.G., 2000, p.158.

(83) 小田, 1991, 付録52頁。

(84) Clarence-Smith, W.G., 2000, pp.144, 208.

1875年にはポルトガル本国政府によって青天の霹靂の如くに奴隷解放が行なわれ、解放奴隷による小規模カカオ生産が急増した⁽⁸⁵⁾。大農園主たちは奴隷に代えて、3年契約の年季奉公労働者をリベリアやナイジェリアから受け入れた。しかし、欧米諸国のカカオ需要の激増に対応するためには奴隷制の復活が必要だという農場主たちの訴えに耳を傾けた本国政府は、終身年季奉公制という巧妙な形式を借りて1880年から実質的に奴隷制を再開させた⁽⁸⁶⁾。

1880年代以後の奴隷の大部分はポルトガル領植民地のアンゴラから送り込まれてきた。アンゴラの奥地で購入された奴隷たちは終身年季奉公労働契約書に署名させられ、委譲契約によってサントメ・プリンシペ両島で売られた。1880年から1908年までの間に、約7万人の実質的な奴隷がこのようにして輸入された。契約の期限が終わると、契約は自動的に更新された。また実質的奴隷の子供たちも、成人すると終身年季奉公労働契約に署名させられた。その実態は1900年代に欧米諸国のジャーナリストらによって暴露されて国際的な非難を浴びた⁽⁸⁷⁾。そこで、アンゴラからの奴隷輸出は1908年に停止され、1910年にポルトガルの政権を握った共和主義者たちによって、現存の奴隷たちは故国に送還された。農園主たちは短期の年季奉公移民労働者の再導入に踏み切った。今回は短期年季奉公労働者の多くはポルトガル植民地のモザンビークから調達された。その数は1915年までにモザンビークからだけでも約3万3,000人、全体としては約6万人に達した⁽⁸⁸⁾。

1880年頃から植民地政府当局は、巨額の資金を持つポルトガル人入植者たちに優先的に国有地を払い下げた。彼らが大農園（ラティフンディオス）を形成したのである。その典型がホセ・コンスタンチノス・ディオスである。彼は1872年にポルトガル北部から出稼ぎにきた貧しい少年だったが、努力と才覚によって大農園主に成り上がった。1万ヘクタール以上の土地を所有し、約4,700人の労働者を使役し、年間約3,500トンのカカオを生産した。ディオスは1910年には爵位を得て、リスボンとパリで贅沢に暮らした。地元で生まれた混血人がカカオ農園経営で大成功して、大富豪になった例も多く、例えばホセ・フェレイラ・ド・アマラルはムラートであった。農園主たちは多額の借金をして、土地と奴隷を購入したが、両島のカカオ経済の金融業務は、1864年に設立されたウルトラ・マリノ国民銀行によって独占された⁽⁸⁹⁾。

20世紀に入る頃から、サントメ島には港湾施設、軽便鉄道、道路、電話と電気などが整備され、ドイツ系企業を先頭に、大農園でカカオの集約的栽培と処理法が導入された。深い穴を掘って種子を蒔き、植樹間隔を広げて緑陰樹を植え、有機肥料を施して除草と剪定を丁寧にするという栽培法である。また、収穫されたカカオ豆は木製の箱の中で数日かけて発酵され、次にセメント製の広大な床の上で乾燥させられた。さらにのちには乾燥機が導入された。このような栽培・処理法は多くの労働力と設備を必要とし、投資額が増大して利潤を圧迫した。カカオの木の寿命は短いのでカカオ栽培前線は次第に島の奥地に侵入していった。そして第一次世界大戦頃には害虫アザミウマ *thrips* が大量発生し、農園に大きな被害を与えた⁽⁹⁰⁾。しかし、両島のカカオ経済

(85) Clarence-Smith, W.G., 2000, p.144.

(86) Clarence-Smith, W.G., 2000, pp.213, 221.

(87) Williams, I. A., 1930, Chapter 8.

(88) Clarence-Smith, W.G., 2000, p.221; Clarence-Smith, 1990, pp.153~4.

(89) Clarence-Smith, W.G., 2000, pp.155~6.

(90) Clarence-Smith, W.G., 2000, pp.184~5.

は、アザミウマにとどめを刺される前にすでに崩壊する運命にあった。1900年から1920年までにカカオの実質価格は3分の1に下がったが、両島の農園主たちはこの価格競争に太刀打ちできなかったのである⁽⁹¹⁾。

G) カメルーン

カメルーンにカカオを持ち込んだのはバプテスト宣教師たちであった。彼らはスペイン領赤道ギアナのフェルナンド・プー島で迫害を受けて、そこから逃れて1858年にカメルーン山の山麓にカカオの木を植えた、と言われる⁽⁹²⁾。カメルーンのカカオ栽培地に関しては〔図9〕を参照されたい。

1885年にドイツはカメルーンの保護領化を宣言し、翌年に総督府を設置し、内陸部に進出して1911年までにこれを完全に支配下におさめた。その植民地政策はドイツ人を入植させて、カカオ、ゴムの木、椰子の木、バナナなどの商品作物を大農園で栽培するというものであった。植民地総督府は道路、鉄道、橋梁などのインフラを整備するとともに、原住民から広大な土地を接収して、彼らを強制労働に就かせた。そのために、原住民の反乱があちこちで勃発した⁽⁹³⁾。

1895年にカメルーン総督になったイエスコ・フォン・プットカーマーは、カメルーン山麓の約9万ヘクタールに及ぶ肥沃な土地からバクウェリ族を追い出して、ドイツのライン地方の産業者やベルリンの銀行家たちを説得して、幾つかのカカオ栽培大農園を設立させた⁽⁹⁴⁾。プットカーマーは原住民に対する「鎮圧政策」を進め、「叛徒」をカカオ農園の長期強制労働に従わせた⁽⁹⁵⁾。ドイツ系企業の農園には石造り倉庫、作業場と労働者住宅が設置され、カカオの集約的栽培法が実施された。森林の木々は伐採されて焼却され、種子穴が掘削されて、緑陰樹が植樹され、カカオは広い間隔で栽培された。除草が集中して行なわれ、剪定と施肥が徹底された。収穫されたカカオ豆は、機械によって集約的に処理された⁽⁹⁶⁾。

ところで、カメルーンで強制労働を利用したのはドイツ人農園主だけではなかった。サナガ川下流域に住むドゥアラ族は、ドイツ人による支配が始まる前から森林地帯に衛星村落を設立し、周辺地域出身の黒人奴隷を使役して椰子の大農園を経営していた。ドゥアラ族は1895年に植民地総督によって故郷から追放されたが、その後は首都ドゥアラに住んで、ムンゴ川やウリ川とその支流に土地を購入し、不在地主として奴隷を使役する大規模なカカオ農園経営を展開した⁽⁹⁷⁾。ここでは、ドイツ企業の農園とは異なって、カカオは粗放的に処理された。カカオ豆は単に積み重ねられてバナナの皮で包まれて発酵させられた。また熱風乾燥器を使わず、バナナの葉の上で太陽光によって乾燥させられた⁽⁹⁸⁾。しかし植民地政府当局は1901年からカメルーンにおける奴隷取引を禁止した⁽⁹⁹⁾。また、1907年の法令によって労賃の現金での支払いを強制化

(91) Clarence-Smith, 1990, pp.170~1.

(92) Clarence-Smith, W.G., 2000, p.145.

(93) 小田, 1991, 65~68頁。

(94) Clarence-Smith, W.G., 2000, p.156.

(95) Clarence-Smith, W.G., 2000, pp.156, 222.

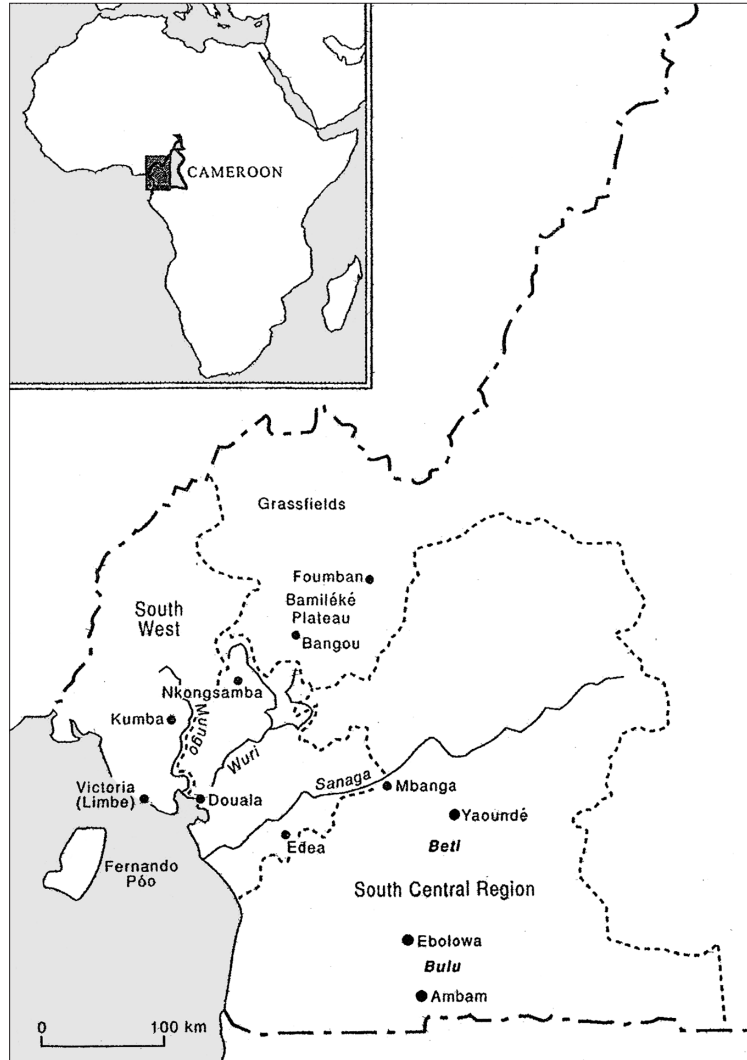
(96) Clarence-Smith, W.G., 2000, p.186.

(97) Clarence-Smith, W.G., 2000, p.223; , Monga, Y. D., 1996, pp.119~21, 126~9.

(98) Monga, Y. D., 1996, p.131.

(99) Clarence-Smith, W.G., 2000, p.223.

図9 カメルーンのカカオ生産地名 (1914-1960)



出典：Eckert, A., 1966, p.138

し、1908年の法令で人头税を賦課したので、カメルーンでは奴隷制の維持は実質的に不可能になった。

第一次世界大戦後にカメルーンの地域面積の約9割はフランスの委任統治領になり、ナイジェリアに近い北西部の約1割の地域がイギリスの委任統治領になった。第一次世界大戦後のカメルーンでは3つの地域でカカオ栽培が行なわれ、それぞれが異なった歴史的展開を見せた。

第1がイギリス統治下カメルーン西南部のバコシ地域である。ここでは元々ドイツ人がカカオ農園を経営するために保持していた地域を、大部族長ヌトコ・エピエの管理下でバコシ族が接収した。バコシ族は、フランス支配下の地域から移住してきたバミレケ族の農民などに、これらの土地を分益小作させてカカオを栽培した⁽¹⁰⁰⁾。

(100) Eckert, A., 1996, pp.139~41.

第2は、フランス統治下のムンゴ地域である。ここにはドゥアラ族のカカオ大農園が展開していたが、奴隷制が維持できなくなると、ドゥアラ族はバミレケ族などを賃労働者として雇用して管理人に農園を経営させた。しかし1930年代には経済不況が訪れて、大農園経営は破綻した。バミレケ族の労働者たちは延滞された賃金の代わりに土地を入手して、自らが農園主となり、賃労働者を雇用してバナナやコーヒーを栽培した⁽¹⁰¹⁾。

第3はフランス統治下の南部中央部である。この熱帯雨林の中を緩やかに移動して生計を立てていたベティ族の社会システムは、元来、遠心的で分裂的であった。しかし、ドイツの植民地政策によって、頂点に大部族長を置きその下に部族長、さらにその下に部族を置く階層制に編成替えさせられた。フランスの植民地当局も「原住民法」を制定して、この階層制を商品作物栽培奨励のために利用した。部族長たちは植民地社会の政治的・経済的エリートとして育てられ、部族民は無報酬で公的事業や族長の営利事業のために自由に徴用された。これをコルベ制という。つまり、ベティ族の部族民は半ば奴隷の境遇に落とされたのである。しかしながら、1930年以後の経済不況と植民地産品の価格崩壊がベティ族の大農園経営に打撃を与えた。また、国際的な圧力に屈してフランス政府はカメルーンにおける強制労働を1930年に正式に禁止した。そして第二次世界大戦後の1946年には「原住民法」が廃止されて、実質的に農地解放が行なわれた。ベティ族の部族民が耕作していた農園の土地が、彼ら自身の所有物となった。こうして、家族単位の小規模カカオ農園経営が広範に成立することになった⁽¹⁰²⁾。フランス領カメルーンが独立を達成した1960年には、カメルーンは世界のカカオ総生産の約6%を産出していた。

H) ガーナ

ガーナは、南部の黄金海岸、中央の森林地域そして北部のサバンナ地域から成る。ガーナのカカオ栽培に関する地名については、[図10]を参照されたい。ガーナでは、すでに17世紀には多数の王国が成立していたが、18世紀には中央部に強大なアシャンティ王国が成立した。アシャンティ王国は金鉱とコーラの木をほぼ独占的に所有して、金とコーラ・ナッツと奴隷を輸出して栄えた。奴隷については、北部サバンナ地域にたびたび侵攻して捕えた捕虜を奴隷として使役し、またその一部をヨーロッパ商人に売却したのである。南の黄金海岸にはファンテ諸国が成立したが、またオランダやイギリスが、自国の商人たちの活動を支援するために城塞を建設した。19世紀中頃までにイギリスはオランダ人を追い出してファンテ諸国を保護領とした。アシャンティ王国は、19世紀初めにはガーナのほぼ全域を支配し、イギリスと数次に亘って軍事衝突したが、イギリスは1874年についてアシャンティを屈服させて保護領とした⁽¹⁰³⁾。こうして「イギリス領黄金海岸」が成立する。これが独立してガーナ共和国が成立するのは、1957年のことである。

黄金海岸には1850年代にバーゼルの改革派宣教師がカカオ栽培を持ち込んだ、といわれる⁽¹⁰⁴⁾。しかし、カカオ栽培が本格化するのには、ようやく1890年代のことである。1911年にはガーナは世界最大のカカオ生産国になり、1923年にはその生産量は20万トンを超え、1936年には30万トンを超えるが、それ以後生産量は停滞する⁽¹⁰⁵⁾。1940年代には swollen shoot というウィル

(101) Eckert, A., 1996, pp.142~3.

(102) Eckert, A., 1996, pp.144~8.

(103) 中村、1994、19~22、50~52、58~61頁。

(104) Clarence-Smith, W.G., 2000, p.145.

図10 植民地時代のガーナのカカオ栽培地



出典：Austin, G., 1996, p.156

ス性のカカオ病によって、ガーナ南部のカカオの木がほぼ全滅した⁽¹⁰⁶⁾。また1950年頃には、中部アシャンティの処女林が無くなってしまった⁽¹⁰⁷⁾。しかし、ガーナの独立後に南西部を中心に第二次カカオ・ブームが起り、1964年にはその生産量は57万トンに達した。その後、カカオ生産は低迷し、1982年以後に持ち直した。こうしてガーナは、1911年から1980年頃まで世界最大のカカオ生産国であり続けた。その担い手は大地主でもヨーロッパ人でもなく、圧倒的にガーナ人の小規模農民たちであった⁽¹⁰⁸⁾。しかしガーナのカカオ生産の中心地は、その間に、南部から中部へ、そして西部へと移っていった。

ガーナでのカカオ栽培ブームを先導したのは、南東部アクアピムの農民たちであった。彼らは

(105) Austin, G., 1997, pp.x~xi.
 (106) Hill, P., 1963, pp.1~2, 23~25, 128.
 (107) Austin, G., 2005, p.445.
 (108) Clarence-Smith, W.G., 2000, pp.218~219.

椰子やゴムの木の栽培と椰子油・生ゴムの取引を通して貨幣経済に接し、豊かになっていたが、1890年頃にカカオ需要の急増の情報を得て、アクアピムでカカオ栽培に着手した。彼らは1897年頃には、大挙して西進してデンス川を渡り、ほとんど人が住まないアキム・アブアクワに入り、その土地を所有する部族長たちから分割払い方式で処女林を購入してカカオ栽培を始めた⁽¹⁰⁹⁾。1900年頃からは、父系制のアクワピム族とクロボ族の移民が土地購入組合（カンパニー）を結成してアキムの処女林を開墾し、他方、母系制のアブリ族やアクロポング族の移民は氏族集団として森林の購入と開発を展開した⁽¹¹⁰⁾。彼らはカカオ栽培の収益を、さらに西の処女林の購入に充てて移住していった。それは処女林の方が既耕地よりも肥沃であり、多くの収穫が期待できるからであった。アキムの処女林は1920年代には無くなってしまい、カカオ栽培前線は西に移動していった。アキムに移住した農民の中には500本以上の木を所有する者もいたが、彼らはドイツ領トーゴからくる移住農民たちに分益小作をさせて、収穫の3分の1を与えた⁽¹¹¹⁾。

ガーナ中央部のアシャンティに、初めてアキムからカカオの実がもたらされたのは、20世紀に入ってからである。アシャンティ族は余所からの移住者にカカオ栽培をさせず、自らが行なったので、そのカカオ栽培様式は、アキムのそれとは異なったものになった。

アシャンティでは19世紀に奴隷制、債務奴隷制、コルベなどの強制労働が広範に行われていた。広大な森林地の人口は極めて少なく、ここでコーラ、ゴム、椰子などの商品作物を栽培し、あるいは金を採掘するためには強制労働が不可欠だったのである。コルベとは、部族民に対して労働奉仕（賦役）を要求できるという部族長の権利であり、西アフリカで広く見られた。植民地総督府も、軍事やインフラ整備のためにこれを利用して、事後的に部族長に謝礼を支払った⁽¹¹²⁾。奴隷は、ほとんどが北部サバンナで捕えられた捕虜であった。他方、債務奴隷 pawn は多くの場合、アシャンティ族の男が借金の担保として自分の子や姉妹の子（甥や姪）の人身を差し出して、後に返済不能になる場合に生じる状態であった。男性の奴隷は森林の開墾や作物の輸送などの重労働に使役され、女性の奴隷や債務奴隷は主人の子を産み育て、あるいは自家消費作物を栽培するために利用された⁽¹¹³⁾。

1874年にガーナを保護国としたイギリス政府は、すでに1807年にイギリス帝国全域で奴隷貿易を禁止し、1833年には奴隷制を禁止していた。したがってイギリス政府はガーナの植民地総督府に対しても奴隷制を廃止するように要請したが、総督府はこれに抵抗した。総督府はガーナの統治と治安維持を地元の部族長たちの力を借りて行った（つまり間接統治した）ので、部族長たちの反抗を恐れて奴隷制の廃止に踏み切れなかったのである。総督府は、本国政府と国際的な圧力に屈して1908年に奴隷制禁止の法令を發布したが、その後も、違反者の取り締まりには消極的であった⁽¹¹⁴⁾。奴隷制はむしろ、カカオ経済の大発展の結果として、次第に自然に消滅していくのである。

20世紀初めのガーナでは賃金労働者は極めて高価だったが、相次ぐ内戦のおかげで奴隷は大変

(109) Hill, P., 1963, pp.15~16, Chapter VIII.

(110) Hill, P., 1963, Chapters II, III.

(111) Clarence-Smith, W.G., 2000, pp.218~9.

(112) Austin, G., 2005, p.217.

(113) Austin, G., 2005, pp.223~235.

(114) Austin, G., 2005, Chapter 11.

安価であった。部族長は大規模な農園で大勢の奴隷を使用し、家族労働を主とする部族民も農地を拡大するに当たっては不自由労働者を使役した。コルベ、奴隷、債務奴隷などの強制労働があったからこそ、アシャンティのカカオ経済は急速に発展したのである⁽¹¹⁵⁾。しかしながら、カカオ栽培地域が拡大し、カカオ経済が発展していくと、強制労働は衰退していった。それにはいろいろな理由がある。まず、カカオ経済の発展のために労働力需要が激増したが、奴隷売買が効果的に禁止されたために奴隷労働力の価格が上昇した。また、1918年のインフルエンザの大流行が労働力不足に輪をかけた。また他方では、カカオ栽培で成功して経営規模の拡大をめざすアシャンティの富裕な農民には経済的な余裕が生まれた。さらに、貧しいアシャンティ農民は、借金の担保に親族の人身を差し出すのではなく、短期的な融資を得るためには来年のカカオの収穫を担保に、長期的な融資を得るためにはカカオの木を担保にすることができるようになった。こうして債務奴隷 pawn は1925年から1940年までに激減した。ガレス・オースティンが言うように、奴隷制とカカオ経済の発展は弁証法的な関係にあったのである。また、北部サバンナ出身の季節労働者は、1920年頃からは長期契約の賃金労働者になっていった⁽¹¹⁶⁾。

こうして、19世紀においてアシャンティ族にとっての奴隷の草刈り場であった北部サバンナ地域は、1920年頃からは賃金労働者の供給地となった。しかし、アシャンティにおけるカカオ経済の進展は、北部サバンナからの移住者たちに更なる好機を与えた。彼らが雇用主と交渉して、農地の収穫の3分の1を受け取る分益小作制の契約を結ぶケースが増加したのである。小作人にとっての分益小作制の利点は、農地経営の革新によって収穫高を上げれば、それだけ収入と利潤が増える、という点にあった。それは彼らが農地所有者になるための近道であった。農業労働者の分益小作農への転換は、その後加速化し、1957年のガーナ独立時まで続く⁽¹¹⁷⁾。そして、1950年頃にはアシャンティの処女林は消滅してしまった。そして、この時に初めて、アシャンティに土地市場が成立するのである⁽¹¹⁸⁾。

1) コートジボワール

1893年にフランス領植民地となった象牙海岸（コートジボワール、英語名でアイヴォリー・コースト）の北半分はサバンナであり、南半分は熱帯雨林地域である。ここには約60の部族が住んでいた。北部にはマンデ語やヴォルタイック語を話すセヌフォ族やディウラ族など、南西部にはクル語を話すバクウェ族やベテ族、そして南東部と中部にはアカン語を話すアンイ族やパウレ族がいた。北部諸部族は放牧を行ない手工業や商業に勤しむ者もいたが、南部の熱帯雨林地域の住民はまばらで、彼らは主に狩猟・採取経済を営んでいた。フランス政府は「原住民法」を制定して、コートジボワールの住民に公共事業への強制労働と人頭税を課した。また既存の部族制社会の組織を利用して、部族長の管理の下で住民にゴムの木や綿花などの商品作物の栽培を強制した⁽¹¹⁹⁾。

(115) Austin, G., 2005, pp.239~241.

(116) Austin, G., 2005, pp.243~246, 315~317. ただし、女性の奴隷は1940年代まで消滅せず、女性の債務奴隷は1980年頃まで見られた。

(117) Austin, G., 2005, pp.318~320.

(118) Austin, G., 2005, p.437.

(119) Chappell, 1989, pp.671~9.

コートジボワールでのカカオ栽培はガーナより数十年遅れて発展したが、この事はフランス政府の抑圧的な植民地政策と関係していた。第二次世界大戦後のコートジボワールのカカオ栽培前線の西漸運動は移入民の龐大な流入に支えられて、恐るべき激しさと速度で展開した。その結果20世紀末にはコートジボワールは、世界のカカオ生産額の3分の1を産出する最大のカカオ生産国になった⁽¹²⁰⁾。

フランスのコートジボワール総督府は1912年にコートジボワールの南東部でカカオ栽培キャンペーンを開始したが、すでに地元のアンイ・ジュアブリン族の一部は隣国ガーナからカカオの苗を持ち込んで1908年からアシカソ地域でカカオの栽培を始めていた。これは彼らが栽培していた生ゴムの価格が低迷したからである。その後、生ゴム価格が急落し、1920年代にカカオ価格が上昇を始めると、原住民によるカカオ栽培が南東部一帯に拡散していった⁽¹²¹⁾。カカオ栽培に関するコートジボワールの地名については、[図11]を参照されたい。

1947年に「原住民法」は廃止されたが、このことはフランス領西アフリカの政治と社会に大きな変化をもたらした。第1に、アフリカ人は政治的権利を獲得し、そのエリートたちが農業組合と国民党を支配したが、コートジボワールではバウレ族出身のウーフェ・ボワニが植民地を代表してフランス本国の国民議会の議員になった。第2に原住民の強制労働が廃止され、彼らは移動の自由を認められた。終戦後においてカカオ豆の価格は急騰し、コートジボワール総督府はマーケティング省を設立した。インフラの整備も進み、カカオ栽培前線は南中部から南西部へと広がっていくが、それは未開熱帯雨林への国内外からの移民の流入に支えられていた⁽¹²²⁾。

未開の熱帯雨林地域がカカオ栽培地域に変化して世界経済の中に組み込まれていく過程は、古い氏族制社会の崩壊を伴っていた。ヘヒトはこの過程を南中部のディヴォ県について詳しく研究した。ディヴォ県の人口は1945年には約9万1千人だったが、1975年には約27万8千人と3倍に増加していた。そしてその増加分のほとんどすべてが県外と国外からの移住によるものであった⁽¹²³⁾。当初、流入してきたよそ者は、地元の氏族社会に吸収同化された。未開の森林や休閑地は家父長制の氏族共同体の所有物とされていたので、余所者は氏族の長老に接近して共同体の末端に加えてもらい、賦役労働と金銭貢納を定期的に行ない、また氏族共同体への忠誠を誓ったのである。ところが余所者の移入が加速化する1960年前後から、この家父長主義的な関係は単なる金銭関係に次第に置き変わり、原住民と移入民は文化的に分離した状態になった⁽¹²⁴⁾。

ディヴォ県には約20の異なった部族が流入してきたが、その主力は東部のバウレ族と北部のディウラ族やモッシ族であった。北部からきた移住民は、将来的に自立した農園主になることを夢見てディーダ族のカカオ農園で労働者として働いた。ディーダ族の農園主は、経営規模を拡大し労働者を確保するために、小区画の森林地を移住者に切り売りしていった。また、バウレ族の移住者は地元のディーダ族から森林の土地を買ってカカオ栽培を行ないながらも、自らは村から離れた草地に住居を構えた。以前は森林地の譲渡は契約書なしで行われていたが、1960年頃からは面積を明記し図面を付した譲渡契約書が作成されるようになった。土地譲渡価格は次第に高騰

(120) Chauveau and Leonard, 1996, p.176.

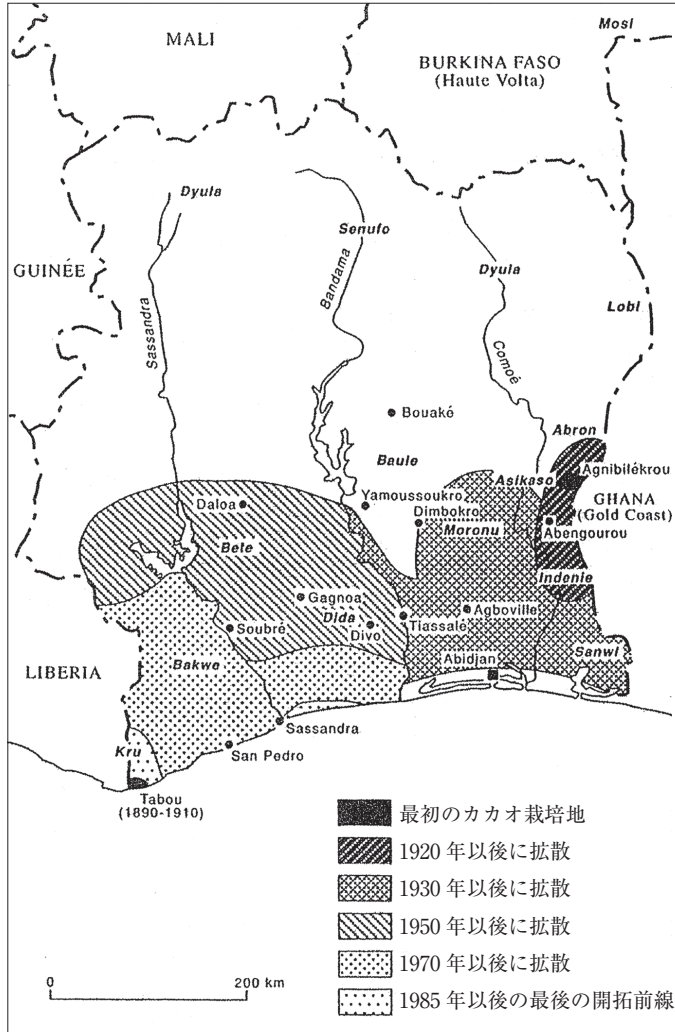
(121) Groff, 1987, pp.4021~16.

(122) Hecht, 1985, pp.322~3; Chauveau and Leonard, 1996, pp.181~3.

(123) Hecht, 1985, p.323.

(124) Hecht, 1985, pp.325~6.

図11 コートジボワールのカカオ栽培の展開



出典：Chauveau, J. P. and E Leonard, 1996, p.177

し、1970年頃からは譲渡された土地の転売も行なわれるようになった。そして、処女地にまで私的土地所有権が確立してくると、それらの土地はもはや氏族の共同的所有物ではなく、夫婦から成る小家族単位の所有物に転化してくるのである⁽¹²⁵⁾。

1970年代からはコートジボワールのカカオ栽培前線は南西部に進行していくのだが、政府はこのような動きを後押しした。コートジボワールがフランスから独立したのは1960年のことである。パウレ族出身でアフリカ農民組合（SAA）の議長でコートジボワール民主党（PDCI）の党首であったウーフェ・ボワニが初代大統領に就任して、独裁政権を樹立した⁽¹²⁶⁾。ウーフェの独裁体制はカカオ、木材、コーヒーから生み出される収入の中央集権的な管理によって財政的に維

(125) Hecht, 1985, pp.326~331.

(126) ウーフェ・ボワニとそのイデオロギーについては、Chappell, 1989を参照。

持された。これら3つの商品の生産と流通はコートジボワールのGDPの3割を占め、輸出額の6割程度を占めた。これらの商品の価格は高止まりを続け、森林と労働力への需要が持続的に拡大した。そのため、政府は小規模土地保有者の創出と移民労働者の受け入れを推進したのである⁽¹²⁷⁾。

コートジボワール南西部の土着民はクル族とバクウェ族だったが、彼らは1988年においては南西部総人口の7.5%を占めるに過ぎなかった。他方、東部からカカオ農園開発のために移住してきたバウレ族が35.7%、北部から労働者として流入したブルキナベ族が34.4%を占めた。バウレ族は南西部で村落から離れたところに定住し、多くの労働者を雇用して大規模にカカオ農園を経営し、ヤムイモやプランテインといった食糧作物を同時に栽培して経営効率を高めた。しかし1990年頃には、ついに処女林は枯渇してしまった⁽¹²⁸⁾。その結果、バウレ族の地主は都市ブルジョワジーに転化していった。多くの労働者が南西部のカカオ生産地域から去っていったが、ここでは新たな動きも起こった。

1つはブルキナベ族地主の躍進である。元来彼らは強い部族内の結束を持っていたので、ブルキナベ族労働者の多くは同族の地主の下に身を寄せて分益小作人になった。ブルキナベ族地主は地元の地主から休耕地を買い、化学肥料を使用するなどの集約的栽培を励行して生産性を上げた。他方、地元のエリートたちは経済危機に対応して食糧生産に注力した。彼らはカカオ栽培に適さない土地や休耕地を多数所有していたが、ここで食用作物の栽培を行なった⁽¹²⁹⁾。20世紀末に至ってコートジボワールのカカオ栽培前線は行き詰まり、同国の農業経済は新たな段階を迎えることになった。

6. おわりに：まとめと展望

カカオの原産地は、中南米の熱帯雨林地域である。しかし、カカオが栽培されていたのはメソアメリカだけであった。スペイン人が「飲むチョコレート（ココア）」に出会って、これを温かくて甘い飲み物に変えてから、チョコレート（ココア）を飲む習慣はスペインと世界中のその植民地、そしてヨーロッパに広がっていった。チョコレートの原料であるカカオへの需要は19世紀後半に増大し、カカオ栽培の中心地はメソアメリカから南米のコロンビアやベネズエラに移っていった。19世紀後半に固形の「食べるチョコレート」の生産に関する一連の技術革新がヨーロッパで起こったために、19世紀末以後、ヨーロッパと北米でカカオへの需要が激増していった。これに応じて、トリニダードやエクアドルや（ブラジルの）バヒアでもカカオ生産が急増した。さらにカカオの実が19世紀中にアフリカに運ばれて、カカオ栽培は赤道アフリカのサントメ・プリンシペ両島で急成長した。しかし、1910年代になるとガーナが世界最大のカカオ生産国になり、1980年代にはコートジボワールが世界のカカオの3分の1を生産することになる。

他の熱帯産商品作物と同じように、カカオの木は土地の栄養分を大いに吸収するようである。カカオの木は森の中で生育するので、カカオ栽培は処女林を開発することによって展開していく。処女林はすでに開発された森林よりも肥沃で、雑草や害虫や病気の脅威がより少ない。カカ

(127) Chauveau and Leonard, 1996, pp.183~4.

(128) Chauveau and Leonard, 1996, pp.185~7.

(129) Chauveau and Leonard, 1996, pp.187~9.

オ栽培の発展の条件は、熱帯雨林と労働力と交通手段の存在であり、それらの条件が整うところに、カカオの種子とカカオ栽培のノウハウが移植されれば、カカオ栽培が発展する。19世紀末までにカカオ栽培前線が大西洋を渡ってアフリカに移ったのは、そのためである。第一次世界大戦の終わり頃に、中南米のカカオ経済は崩壊する。しかし、その頃になっても、トリニダードやバヒアには肥沃な処女林は多く残されていた。中南米のカカオ産業が西アフリカのそれに敗北した原因は、むしろ、生産コストの差異にあったのである。

他の熱帯産商品作物（例えば砂糖黍）と違って、カカオの木は大農園制に適さないという特徴がある。カカオは10メートルほどにしか成長しない樹木であり、緑陰樹を必要とする。つまり、元来森林の中で適切に生育する。したがって、カカオ栽培は小規模で粗放的な経営に適している。カカオ栽培が発展した地域では、どこでも、当初は強制労働力（奴隷や債務奴隷や賦役労働）が利用されたが、費用対効果から見ると、強制労働力を使用する意味はあまりなかった。だから、中南米では不法土地耕作者のカカオ栽培が大規模農園に対抗して存続することができた。他方、西アフリカのガーナやコートジボワールのカカオ栽培は、圧倒的に（家族労働を主とする）アフリカ人小規模農民によって行なわれた。アフリカでのヨーロッパ人による、機械や大規模施設を備えたカカオ栽培大農園は、設備費や人件費の大きさに耐えられず、ことごとく失敗したのである。

したがって、カカオ栽培は、大農園における大規模集団労働 *gang labour* にも、賃労働にも適さない。それに最も適合的なのは分益小作制であった。分益小作制を採用することによって、地主は、経済的に最も困難な時期に労働者への労働の対価支給のスピードを最大限に遅らせることができた。また、樹木の生産性、労働市場の状態とカカオ価格の変動を、小作人との間で適切に分益することができた⁽¹³⁰⁾。また、小作農にとっては、自らの経営努力によって収穫高を上げて、収益を増加させることができた。実際ガーナでは1930年代以後、北部サバンナから来た賃金労働農民たちが地主と交渉して分益小作農に転換していく動きが加速化したのである。

以上、カカオ栽培前線の歴史的展開について概観してきたが、カカオ栽培の世界的展開は、開発経済論やグローバル経済史を考える上で非常に興味深い事例を提供している。最後にそれらについて触れておこう。

まずクラレンス＝スミスによれば、後進国にとって商品作物の輸出は、経済発展の袋小路なのではない。それは経済発展のための唯一可能な筋道なのである。それが失敗するのは当該後進国の経済政策が不適切だからである⁽¹³¹⁾。クラレンス＝スミスは、幕末維新期の日本を例として挙げている。確かに、この時期の日本は、生糸や茶の輸出で外貨を稼ぎ、その蓄積を基にしながら明治政府の殖産興業政策によって工業化の手掛かりをつかんだ、とも言えよう。もし、彼の主張が正しいのならば、例えばベネズエラやガーナやコートジボワールの経済発展が挫折したのは、それらの国々の経済政策のどこがどう間違っていたのだろうか。

もう1つの興味深い問題は、カカオ豆の流通と金融の歴史である。中南米でも、アフリカでも、カカオ生産地の地域内取引と金融においては、主に現地の商人が活動したが、カカオ豆の国際的取引においては、バスク人やスペイン系ユダヤ人が重要な役割を果たした⁽¹³²⁾。しかし、19

(130) Clarence-Smith and Ruf, pp.10~11.

(131) Clarence-Smith, W.G., 2000, p.227.

(132) Clarence-Smith, W.G., 2000, p.94.

世紀後半以後に国際的なカカオ取引の規模が増大すると、アメリカ商人、北ドイツ商人、コルシカ商人さらにはポルトガル商人がこれに参加してくる⁽¹³³⁾。19世紀末以後のカカオ需要は幾何級数的に増加するのであるが、この時期には電信網の世界的拡張と蒸気船と鉄道による運輸革命が展開していた。これ以後、カカオ豆の国際価格が均一化し、1900年代には西洋のカカオ輸入港はハンブルク、ニューヨーク、ルアーブル、ロンドンの4港に集中し、商業機構の垂直統合が形成されていった⁽¹³⁴⁾。西アフリカでは、ヨーロッパの商社がカカオ栽培地域にゆっくりと侵入し、道路や鉄道が整備されるにつれて内陸に支店を広げ、アフリカ人の代理人を通して活動した⁽¹³⁵⁾。ところが、20世紀末の国際的なカカオ豆取引は、スイスに本拠を置くバーリー・カレポー社、同じくスイスに本拠を置くネスレ社、アメリカの巨大食品企業カーギル社、そして同じくアメリカのアーチャー・ダニエル・ミッドランド社という、わずか4つの巨大多国籍企業によって牛耳られている。カカオ取引とその金融は、20世紀の間に、特に第二次世界大戦後のどのように変化したのであろうか。これは、現代経済史の重要な問題の1つであらう。

●参考文献

- Austin G., 1996, 'Mode of Production or Mode of Cultivation: explaining the failure of European cocoa planters in competition with African farmers in colonial Ghana' in Clarence-Smith, W. G. ed., *Cocoa Pioneer Fronts*.
- Austin, G., 1997, 'Introduction' in Hill, P., 1997.
- Austin, G., 2005, *Labour, Land and Capital in Ghana: from slavery to free labour in Asante, 1807-1956*, University of Rochester Press.
- Benjamin, T., 1989, *A Rich Land, A Poor People: politics and society in modern Chiapas*, University of New Mexico Press, U. S..
- Cadbury, W. A., 1910, *Labour in Portuguese West Africa*, Routledge, U.K..
- Campbell, G. R., 1996, 'The Cocoa Frontier in Madagascar, the Comoro Island and Reunion, c. 1820-1970' in Clarence-Smith, W. G. ed., *Cocoa Pioneer Fronts*.
- Chappell, D. A., 1989, 'The Nation as Frontier: ethnicity and clientelism in Ivorian history' in *The International Journal of African Historical Studies*, vol.22, no.4.
- Chauveau, J. P. and E. Leonard, 1996, 'Cote d'Ivoire's Pioneer Fronts: historical and political determinants of the spread of cocoa cultivation' in Clarence-Smith, W. G. ed., *Cocoa Pioneer Fronts*.
- Clarence-Smith, W. G., 1990, 'The Hidden Costs of Labour in the Cocoa Plantations of Sao-Tome and Principe, 1875-1914', *Portuguese Studies*, No. 6.
- Clarence-Smith, W. G. ed., 1996, *Cocoa Pioneer Fronts since 1800: the role of smallholders, planters and merchants*, Macmillan, U.K..
- Clarence-Smith, W. G., 2000, *Cocoa and Chocolate, 1765-1914*, Routledge, U.K..
- Clarence-Smith, W. G. and F. Ruf, 1996, 'Cocoa Pioneer Fronts: the historical determinants', in Clarence-Smith, W. G. ed., *Cocoa Pioneer Fronts*.
- Coe, S.D. and M.D. Coe, 1966, *The True History of Chocolate*, London, Thames and Hudson, 樋口幸子訳『チョコレートの歴史』河出書房（文庫）、2017。
- Eckert A., 1996, 'Cocoa Farming in Cameroon, c.1914-c.1960: land and labour', in Clarence-Smith, W. G. ed. *Cocoa Pioneer Fronts*.
- Green, R. H. and S. H. Hymer, 1996, 'Cocoa, in the Gold Coast: a study in the relationship between African

(133) Clarence-Smith, W.G., 2000, pp.101~110.

(134) Clarence-Smith, W.G., 2000, pp.112~113.

(135) Clarence-Smith, W.G., 2000, p.118.

- farmers and agricultural experts', in *Journal of Economic History*, vol.26.
- Greenhill, R. G., 1996, 'A Cocoa Pioneer Front, 1880~1914: planters, merchants and government policy in Bahia' in Clarence-Smith, W. G. ed. *Cocoa Pioneer Fronts*.
- Groff, D. H., 1987, 'Carrots, Sticks and Cocoa Pods: African and administrative initiatives in the spread of cocoa cultivation in Assikasso, Ivory Coast, 1908~1920' in *The International Journal of African Historical Studies*, vol.20, no.3.
- Hecht, R., 1985, 'Immigration, Land Transfer and Tenure Change in Divo, Ivory Coast, 1940~1980' in *Africa*, vol.55, no.3.
- Hill, P., 1963, *The Migrant Cocoa-Farmers in Southern Ghana: a study in rural capitalism*, Cambridge University Press, reprinted by James Curry 1997.
- Lewis, K. P., 1996, 'The Trinidad Cocoa Industry and the Struggle for Crown Land during the Nineteenth Century' in Clarence-Smith, W. G. ed. *Cocoa Pioneer Fronts*.
- Maiguashca, J., 1996, 'Ecuadorian Cocoa Production and Trade, 1840~1925' in Clarence-Smith, W. G. ed., *Cocoa Pioneer Fronts*.
- Monga Y. D., 1996, 'The Emergence of Duala Cocoa Planters under German Rule in Cameroon: a case study of entrepreneurship' in Clarence-Smith, W. G. ed., *Cocoa Pioneer Fronts*.
- Off, C., 2006, *Bitter Chocolate, investigating the dark side of the world's most seductive sweet*, Random House, Canada, 北村陽子訳『チョコレートの真実』英治出版、2007.
- Ruf F., Ehret P. and Yoddang, 1996, 'Smallholder Cocoa in Indonesia: why a cocoa boom in Sulawesi?' in Clarence-Smith, W. G. ed., *Cocoa Pioneer Fronts*.
- Sundiata, I., 1996, 'Equatorial Guiana: the struggle for a cocoa economy, 1880~1930' in Clarence-Smith, W. G. ed., *Cocoa Pioneer Fronts*.
- Vallenilla, N. H., 1996, 'The Eastern Venezuela Pioneer Front, 1830s~1930s: the role of the Corsican trade network', in Clarence-Smith, W. G. ed., *Cocoa Pioneer Fronts*.
- Williams, I. A., 1930, *The Firm of Cadbury: 1831~1931*, Constable, London, U.K.
- 小田英郎、1991、『アフリカ現代史Ⅲ：中部アフリカ』（第2版）山川出版社。
- 斉藤広志・中川文雄、1978、『ラテン・アメリカ現代史Ⅰ：総説・ブラジル』山川出版社。
- 高根務、1999、『ガーナのココア生産農民：小農輸出作物生産の社会的側面』日本貿易振興会・アジア経済研究所。
- 武田尚子、2010、『チョコレートの世界史』中央公論（新書）。
- 中川文雄・松下洋・遅野井茂雄、1985、『ラテン・アメリカ現代史Ⅱ：アンデス・ラプラタ地域』山川出版社。
- 中村弘光、1994、『アフリカ現代史Ⅳ：西アフリカ』（第2版）山川出版社。
- 二村久則・野田隆・牛田千鶴・志柿光浩、2006、『ラテン・アメリカ現代史Ⅲ：メキシコ・中米・カリブ海地域』山川出版社。
- 山本通、2018、「チョコレート産業史の魅力」『一橋大学基督教青年会会報』第70号。
- 山本通、2019、「英国チョコレート企業間の競争と協調：1761~1988年」『経済貿易研究』（神奈川大学）第45号。